

鳥羽離宮跡発掘調査概報

昭和60年度

京 都 市 文 化 観 光 局
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

多数の文化財と優れた伝統文化の継承に幾多の労をついやしている歴史都市「京都」は、より活力ある豊かな近代都市建設にむかって発展の取り組みを強めているところであり、更に平安建都1200年の歴史的節目を8年後に迎えようとしております。

この平安建都1200年記念事業並びに21世紀の理想のまちづくり計画は、都市の優れた伝統のうえに新しい創造を加えるもので、市民が一体となって取り組んでいるところです。

しかしながら、まちづくりの基幹としての「都市建設事業」は、歴史的文化遺産の保存と継承に大きな影響を与えるもので、本市では埋蔵文化財の保存については、市民の理解と協力を得て行っており、また保存し難い遺跡の調査についても市民の協力を得ているものです。

この調査概報は、昭和60年度国庫補助事業として実施した発掘調査の概要をまとめたものであり、本書が埋蔵文化財の研究に、また有用な資料としてご活用いただければ幸いです。

本調査の実施にあたり調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、及び御指導いただいた関係各位、並びに市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和61年3月

京都市文化観光局

例 言

1. 本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した文化庁国庫補助を伴う昭和60年度の鳥羽離宮跡発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は6ヶ所実施した。発掘調査次数は、第107次・第110次・第111次・第112次・第113次・第115次調査である。調査地は以下のとおりである。
 - I 第107次 伏見区竹田小屋ノ内町43-1・2 (昭和59年度調査)
 - II 第110次 伏見区竹田浄菩提院町73-3
 - III 第111次 伏見区竹田小屋ノ内町1-1, 浄菩提院町72-2
 - IV 第112次 伏見区竹田浄菩提院町58-1
 - V 第113次 伏見区竹田小屋ノ内町3-1
 - VI 第115次 伏見区中島秋ノ山町27-1
3. 本書の執筆は以下の通りである。
 - I 第107次：鈴木久男、II 第110次：中村敦、III 第111次：鈴木久男、IV 第112次：前田義明・鈴木久男・吉崎伸、V 第113次：堀内明博・鈴木久男・北田栄造、VI 第115次：鈴木久男、VII 第112次調査の種実・樹種分析：岡田文男。
4. 写真は主に牛嶋茂が行い、一部村井信也が担当した。植物遺体は岡田文男が行った。
5. 図中に使用した方位・座標は、新平面直角座標系 (VI) による。
6. 標高はTP (東京湾平均海面高度) を用いた。
7. 文章及び断面図の土壌の色名は農林省農林水産技術会議事務局の監修による新版標準土色帖を用いた。
8. 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方法に基づき使用した。
9. 本書に使用した地図は京都市都市計画局発行の2500分の1の地図 (城南宮) を、京都市の承認を得て使用した。
10. 第110・113次調査の平面図は写真測量による実測図を用いた。
11. 図版24～28の(×40)は実物の40倍を示す。

本文目次

I	第107次調査	1
	1 調査経過	1
	2 遺構	2
	3 遺物	2
	4 まとめ	3
II	第110次調査	4
	1 調査経過	4
	2 遺構	5
	3 遺物	6
	4 まとめ	7
III	第111次調査	8
	1 調査経過	8
	2 遺構	9
	3 遺物	10
	4 まとめ	10
IV	第112次調査	11
	1 調査経過	11
	2 遺構	11
	3 遺物	13
	4 まとめ	18
V	第113次調査	19
	1 調査経過	19
	2 遺構	19
	3 遺物	21
	4 まとめ	23

Ⅵ 第115次調査	24
1 調査経過	24
2 遺構	24
3 遺物	26
4 まとめ	27
Ⅶ 第112次調査の種実・樹種分析	29
1 汀線付近の植物種実の調査	29
2 SX4使用木材の樹種調査	34
3 木製品の樹種調査	37

図 版 目 次

図版 1 遺跡 航空写真	1 鳥羽離宮跡遠景 (東から) 昭和60年度撮影 2 金剛 心院跡遠景 (南から) 昭和60年度撮影
2 遺跡 第107次調査	1 調査区全景 2 瓦出土状況 3 汀線
3 遺跡 第110次調査	1 調査地全景 (北から) 2 調査地全景 (東から)
4 遺跡 第110次調査	1 東端石列 (北西から) 2 東端石列細部 (北から) 3 東端石列細部 (南から)
5 遺跡 第110次調査	1 石組み細部 (東から) 2 石組み細部 (東から) 3 南 東部埋土断面 (北から) 4 舌状遺構検出状況 (西から)
6 遺跡 第110次調査	1 南側断割部 (北西から) 2 北側断割部断面 (北から)
7 遺跡 第111次調査	1 調査区全景 (南から) 2 景石検出状況 (南から)
8 遺跡 第112次調査	調査地遠景 (西から)
9 遺跡 第112次調査	1 調査区全景 (西から) 2 調査区北部 (東から)
10 遺跡 第112次調査	1 SX4 (北西から) 2 SX4 (南西から)
11 遺跡 第112次調査	1 SX4 (北西から) 2 SX4ーリ 土留め 3 SX4 一ホ 土留め
12 遺跡 第112次調査	1 SX4 (南から) 2 SX4北部 (南から) 3 SX4 一ニ 土留め
13 遺跡 第112次調査	1 SX4 完掘状況 2 SX4中央 3 SX4ーニ カマ ス出土状況

- 14 遺跡 第112次調査 1 調査区西南部（北から） 2 池肩口（南から）
- 15 遺跡 第113次調査 1 調査区全景（西から） 2 調査区西部（北から）
- 16 遺跡 第115次調査 1 調査区全景（北西から） 2 景石検出状況（北西から）
- 17 遺物 第107次調査 軒丸瓦・軒平瓦
- 18 遺物 第111次調査 軒丸瓦・軒平瓦
- 19 遺物 第112次調査 軒丸瓦・軒平瓦
- 20 遺物 第112次調査 木製品 1（蓋：1 円盤：2 杓子：3 下駄：4・5）
- 21 遺物 第112次調査 木製品 2（五輪空・風輪：6 火輪：6・7・9～14 水輪：15・17～20・22～27 地輪：29・31～37）
- 22 遺物 第112次調査 木製品 3（五輪塔組み立て例 S X 4 使用板材）
- 23 遺物 第113次調査 軒丸瓦・軒平瓦
- 24 遺物 自然遺物 第112次調査 出土木製品・S X 4 使用木材顕微鏡写真
- 25 遺物 自然遺物 第112次調査 S X 4 使用木材顕微鏡写真
- 26 遺物 自然遺物 第112次調査 出土木製品・S X 4 使用木材顕微鏡写真
- 27 遺物 自然遺物 第112次調査 出土木製品・S X 4 使用木材顕微鏡写真
- 28 遺物 自然遺物 第112次調査 1 年輪 2 汀線付近の植物種実
- 29 遺跡 調査位置図
- 30 遺跡 東殿跡遺構配置図
- 31 遺跡 金剛心院跡及び周辺遺構配置図
- 32 遺跡 第110次調査 遺構実測図
- 33 遺跡 第110次調査 断面図・立面図
- 34 遺跡 第112次調査 遺構実測図
- 35 遺跡 第112次調査 S X 4 実測図
- 36 遺跡 第113次調査 遺構実測図
- 37 遺物 第107次調査 軒丸瓦・軒平瓦拓影実測図
- 38 遺物 第111次調査 軒丸瓦・軒平瓦拓影実測図
- 39 遺物 第112次調査 軒丸瓦・軒平瓦拓影実測図
- 40 遺物 第112次調査 出土木製品実測図 五輪塔 空風輪：6 火輪：7～14
水輪：15～28 地輪：29～39
- 41 遺物 第113次調査 軒丸瓦・軒平瓦拓影実測図

挿 図 目 次

図 1	調査区配置図 (1:2,500)	1
2	東壁断面図	2
3	遺構実測図	3
4	調査区配置図 (1:2,500)	4
5	舌状遺構位置図	6
6	調査区配置図 (1:2,500)	8
7	遺構実測図	9
8	北壁断面図	11
9	SX4 立面図	12
10	出土土器実測図 (SG1:1 SX4:2~4 SD3:3~10)	15
11	出土木製品実測図 (蓋:1 円盤:2 杓子:3 下駄:4・5)	16
12	出土刀子実測図	18
13	調査区南壁断面図	19
14	SD1北壁断面図	20
15	調査区配置図 (1:5,000)	24
16	遺構実測図	25
17	西壁断面図	25
18	軒丸瓦・軒平瓦拓影実測図	26
19	調査区配置図	28
20	SG1植物遺体採集地点	29

表 目 次

表 1	池SG1汀線検出の植物遺体 (木本)	31
2	池SG1汀線検出の植物遺体 (草本)	31
3	SX4木材の樹種	35
4	SX4杭の大きさ	36
5	池SG1堆積物中に含まれる木本種実	38
6	池SG1堆積物中に含まれる草本種実	38
7	SX4樹種調査結果	39
8	出土木製品樹種調査結果	40

I 第107次調査

1 調査経過

今回の調査地は、金剛心院跡の南側に位置し釈迦堂跡の南正面約80m南方にある水田地である。周辺部で実施した調査では、釈迦堂・釣殿廊・小御堂などの建物跡や複雑に入りくむ池跡などが発見されている。このため、遺構の有無をまず確かめるために試掘調査を実施した。その結果、第97次調査で検出した池跡と同一のものと考えられる池の痕跡が認められたため、発掘調査へと移行した。

調査は、まず重機を導入して耕土・床土・近世の遺物を含む茶褐色砂泥層まで掘り下げた。また、調査面積を広くするために一部残土を場外搬出した。調査の進展にともなって、北から南へ下がる傾斜面が徐々に明らかになった。調査の終了段階になって、西側へ広がる池肩の様子を見るために西側を更に拡張した。

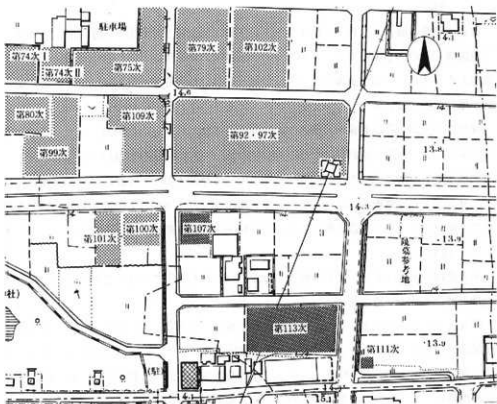


図1 調査区配置図 (1 : 2,500)

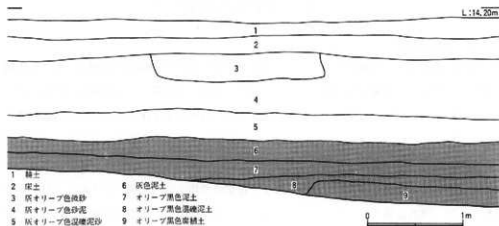


図2 東壁断面図

2 遺構

調査地の基本層序は、耕土・暗オリーブ色泥砂（床土）、灰オリーブ色砂泥、灰オリーブ色混礫泥土の順で堆積する。これより下の層は池内堆積土となる。池内堆積層は上から灰色泥土、オリーブ黒色混礫泥土である。最下層は、松傘を多く含むオリーブ黒色腐植土層が堆積している。

検出した池跡の汀は北東から南西方向に向かって認められ、南東方向に向かって池は徐々に深くなる。水際の傾斜面は10°前後と大変ゆるやかである。池の汀には、顕著な洲浜の痕跡や庭石を据え付けたような跡はなかった。性格は不明であるが、岸から池底に向かって丸瓦・平瓦が直線的に並べられたものが検出された。同様なものは、第99・109次調査でも発見されている。池の推定水位は12m 40cmから60cm前後と考えられる。

3 遺物

出土遺物の大半は瓦で、土器は極めて少なくいずれも小片である。これらは、池内堆積土最下層のオリーブ黒色腐植土層から出土した。

軒丸瓦（図17・37-1～4） 簡略化された複弁六弁蓮華文で、蓮弁は互いに接する。中房は半円状に盛り上がり、中房を囲む圏線は内側に傾斜する。4点とも同文の異範である。瓦当部上面は接合部を横方向に丁寧になる。丸瓦凹面には粘土板切り取り時の糸切り痕が残る。瓦当裏面は丁寧な横方向のナデを施す。焼成は良好である。播磨産である。

軒平瓦（図17・37-5・6） 5は数例より、左右に反転する均整唐草文軒平瓦である

ことがわかっている。同范品からこの唐草文の先が一部右脇に接することがわかる。接合方法は、包み込み式である。焼成は良好で、播磨産である。

6は右方向に巻き込む三巴文を横に並列する。尾は互いに接し圏線を描く。顎は直線に近く、瓦当部凹面及び顎下端は横方向に削る。平瓦部凸面はやや粗い縄タタキの痕跡が明瞭に残る。側面は瓦当范に見合うように瓦当部に近いところだけ削る。瓦当部の横幅と平瓦部先端の幅はほとんど差が認められず、わずかに平瓦部先端の方が幅広である。讃岐産。

4 まとめ

今回調査を実施した池跡は、位置や汀の方向、水位などから第79・97・102次などで発見した園池の一部であると考えられる。この園池は、金剛心院釈迦堂の東面及び南側に造営されたものである。汀には、洲浜や景石など認められず先の調査で検出した池の景観とは若干異なったものである。このような現象は主要建物から離れたためか、あるいは景観を人為的に変化させているかにかかわったものと思われる。また、昭和60年度実施した第109次調査でも九鉢阿弥陀堂の東面に別の南北に伸びる園池が検出されている。今回の調査地は、これらの園池が複雑に入り組んだ地点に位置しており、金剛心院南半における調査の進展が望まれる。

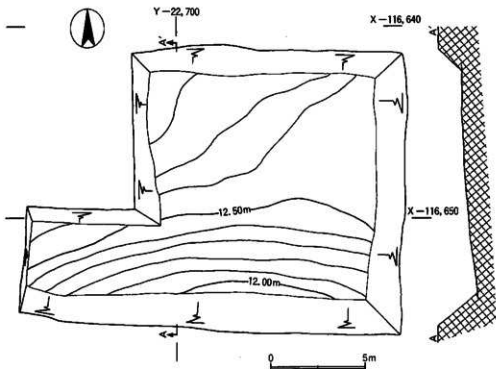


図3 遺構実測図

Ⅱ 第110次調査

1 調査経過

調査地は、昭和46・47年度に発掘調査が行われた舟着場推定地にあたる。今回の調査は、昭和47年度調査区域のほぼ中央付近に位置し再度調査する機会を得た。このことは、前回に検出した遺構が近年の調査によって明らかになった金剛心院の建物地業に類似していること、平安前期の遺構面と舟着場推定地の水位が矛盾する事など遺構の再検討が望まれていた。こうしてこの度倉庫建設が予定されることになり、これに伴って調査を実施することになった。また、調査期間・遺構の保存対策などから構築法に関する全面的調査を断念し、石積み遺構（前回舟着場と想定した遺構）の構築年代がいつ頃のものであるかを確認することによって新たな検討資料をみいだすことを目的とした。

調査は、まず前回の調査状態にもどし、そこで石積み遺構の平面図の作成と遺構の断ち割りによってベースとなっている土層堆積の確認と遺物を発見することにつとめた。また、調査地北側の下水工事に伴う調査で石積み遺構埋土最下層より瓦器機など平安後期の遺物が出土していることから再度その土層の確認も行った。そして、石積み下層から数点の遺物を4ヶ所で発見し、新たな知見を得た。

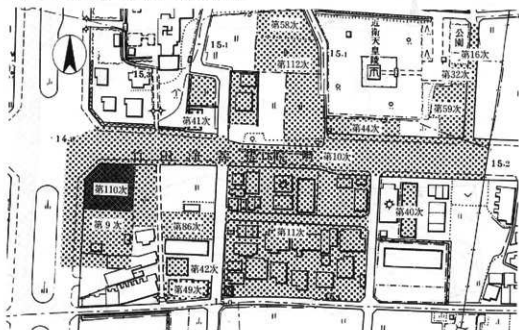


図4 調査区位置図 (1:2,500)

2 遺構

調査地の基本層序は、耕土を除去すると前回の調査時の埋め戻しの砂層になる。この砂層を除去すると石積み遺構を構成している砂・砂礫、或は礫層などが認められる。そして、その下層は、腐植土層、砂層となっている。この下層の両層は、鳥羽離宮東殿跡の中でも第10・41・86・112次調査といった園池関係の遺構が発見されているところで認められている。これらの土層は、下水道工事に伴う立会調査によって層位的にも類似することが確認されている。なお、今回検出した遺構は腐植土層の上に造られている。遺構には石積み遺構と舌状遺構がある。石積み遺構は再調査で、舌状遺構は今回新に確認したものである。

石積み遺構 この遺構の地業単位にあたる南北の石列7列と東西列を8列検出した。しかし、本来はもっと細かく複雑に組み合っていると思われる。南北の石列の各幅は最も広いもので約8m、狭いもので約3.3mを測る。また、東から1列目と2列目、2列目と3列目の間隔は約3.6mを測る。地業の深さは約0.5～1.5mを測る。約0.5mと浅いのは、下層舌状の遺構が存在するためである。地業の埋土は、砂あるいは砂礫を拳大かそれよりも大きめの河原石と互層に構築されている。また、石組の裏ごめとして部分的に黄褐色砂泥の土が詰められている。さらに、石列には石組の面が相対しているものがあり突堤状に造られた部分もある。この地業の構築法の調査は、断ち割り断面と石組みを観察するにとどまった。しかし、部分的な調査であったが下記のような成果を得た。

この遺構は、上に積み上げることに對して大きく三段階の仕事をしている。まず、拳大から人頭大の石を厚さ20～40cm整地している。これは舌状遺構の先端部の高さと同様である。なお、この土層の底部には単位を示す石列が認められない。次に整地した面に基準となる南北の石列を並べているようである。しかし、東西の石列や南北といった石列の仕事の順序といったものは未調査のため詳細は不明である。この基準となる石は比較的大きめの石を用いている。この基準の石より40～50cm石列には石を積み上げ、内には砂ないし砂礫と河原石を交互に盛り上げている。石列2列で一對となるような何本かの突堤状のものをまずつくる。そして、その間を埋めたとてるといった仕事をしている。なお、基準となる石列の最下部にあたる所には、石の面が相対して1～2段ほど積み上げられ突堤状になる方の上に石が組まれている。この段階の標高は13.8m前後で鳥羽離宮東殿跡付近の遺構面を形成している高さである。そして、舌状遺構の高い方にも対応している。次の三段階目として、標高14.3m前後まで整地している。仕事としては二段階目と同じである。ここで異なるのは今回の遺構検出面である高さにおいて黄褐色泥砂層が部分的にある単位

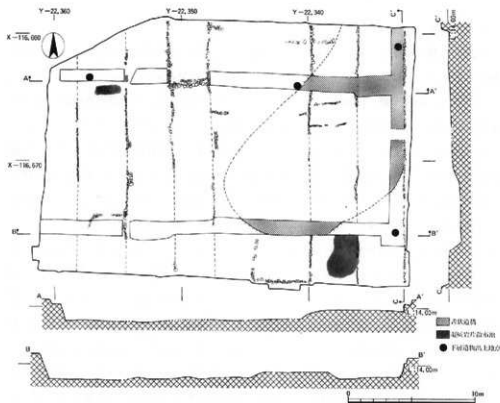


図5 舌状遺構位置図

の範囲内で認められることである。特に顕著な部分は東から1列目と2列目の石列の間である。さらに、この土層には凝灰岩片が混入している部分もある。

以上が今回調査で再確認したことである。なお、全体的な構築法については類例との比較検討をふくめて今後の課題である。

舌状遺構 調査区の北東から南西にのびる人為的な盛土によってなる舌状の遺構である。幅11m弱、長さ20m以上、厚さ約0.8mからなる。北東隅と先端部の高低差は約30cmある。この遺構を石積み遺構と区別したのは、石積みの地業単位と異なる方向を向いていることや、石積み遺構より古い遺物が出土したことによる。この遺構は、砂層をベースに腐植土層が堆積した後、その上に暗青灰色粘土・青灰色シルト層が盛られている。また、この土層には水草の根や茎の痕跡が認められた。そして、第112次調査の遺構面の標高と同じ高さにあることから陸部から張り出す人為的な陸部か島の可能性がある。

3 遺物

内容は土師器・須恵器・瓦器・瓦などがある。土師器には古墳時代のものが混入してお

り、地業の埋土である黄褐色泥砂層から出土している。地点は調査区の東から石列1列目と2列目の間で20数点出土した。また、この土層上面から平安後期の平瓦が出土した。今回の出土遺物のなかで特に貴重な遺物は、石積み遺構の下で確認した舌状のマウンドを形成する土層より出土した土師器皿4点である。図示するに至らないものであるが口縁部はわずかに外反し、外面に二段ナデが残るもので12世紀前半の様相を残している。また、石積み遺構の埋土最下層を形成する礫層の下の腐植土層より内外面に丁寧なミガキが残る12世紀前半と思われる瓦器碗片が出土した。

さらに、調査地北側の下水工事に伴う試掘調査で石積み遺構最下層の礫層から粗いミガキを施した12世紀中頃の瓦器碗が2点出土していることもみのがせない。この遺物の時期は第112次調査の庭園の鳥伏遺構・堤状遺構の形成された時期と同じで東殿を考えるうえで貴重な資料である。

4 まとめ

調査成果は、石積み遺構の構築年代を知る手がかりとなる土師器が、この遺構下層の暗青灰色粘土層から4点出土し、その遺物の年代を12世紀前半に比定できたことである。そしてこの遺構が平安前期まで遡らないことが明らかとなった。

また、今回の調査の下層にみられた砂層は、第86・112次調査の遺構のベースとなっている砂層と層位的に同一である。これは下水道工事に伴う立会調査で確認されている。そしてこの砂層の上に腐植土層がある一定の範囲で堆積していることも確認されている。このことからこの砂層が当初の鳥羽離宮泉殿・東殿園池の池底部の湧水層にあたるのではないかと想定できる。さらに、この大規模な土木工事を伴った石積み遺構が舟着場でなく12世紀中頃に構築された建物地業の可能性が強い。この規模に類似する建物は金剛心院九鉢阿弥陀堂（東西約20m、南北約50mの掘り込み地業）に求めることができる。しかし、この石積み遺構は東西約55m、南北約100mと規模が大きく、そしてさらに東へ伸びる地業（第86次調査）も確認されている。このことからおそらくこの遺構が建物部だけではなく、建物周囲の園池にまでおよぶ地業であると考えられる。なお、石積みの地業は金剛心院九鉢阿弥陀堂・釈迦堂、第43・45・65次調査で検出した推定9間堂などがある。

以上のことをふまえて土地利用の変遷を考えるならば11世紀末に泉殿・東殿の園池があり12世紀前半代に今回検出した舌状のマウンドが作られる。そして、園池の水位を維持するかのようになり東西に池を二分するほどの大土木工を行い、九鉢阿弥陀堂規模の東面する建物が12世紀中頃に造営されたと推定できる。

Ⅲ 第111次調査

1 調査経過

調査地は、城南宮の東方約120m、第13次調査地の北隣に位置する。この付近は、ほとんど調査されておらず、鳥羽離宮関係の遺構の有無については全く知られていない地域であった。このため建築工事に先だって当地を試掘調査することになった。調査の結果、調査対象地の北西隅で池跡と汀に据え付けられた景石を検出した。このため京都市埋蔵文化財調査センターと当地に建築工事を行う受益者とが発掘調査実施について協議した。しかし、この間に試掘調査に参加した土木業者は、検出した庭石を重機で取り上げこれを破壊した。再度、受益者と埋蔵文化財調査センターとが協議を行い短期間ではあるが発掘調査が可能となった。発掘調査は、建物建設予定地を業者がGL-200cmまで掘り下げた後に開始した。

発掘調査は、試掘調査で検出した景石周辺部を中心に実施した。その結果、新たに2個の景石を発見することができた。

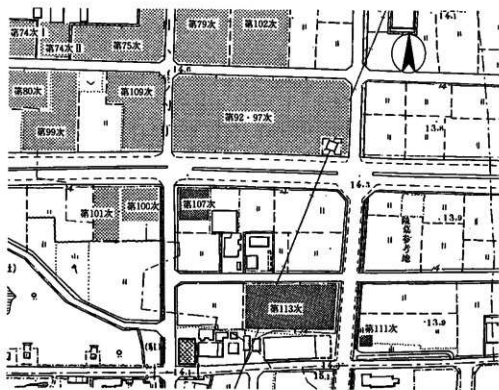


図6 調査位置図 (1 : 2,500)

2 遺構

調査地の基本層序は、盛土下に現代の水田耕土・床土、淡褐色細砂、黄褐色砂泥、黄灰色砂泥、黄灰色泥土層が堆積していた。黄灰色泥土層以下は池内堆積層となるため池部と陸部とで若干の違いが認められた。

検出した遺構は、池の汀に景石を東西にならべた庭園遺構の一部である。景石に利用されていた石はいずれも花崗岩で角の丸いものである。池の屑口は断割りの結果、旧低湿地もしくは離宮造営時以前の池を埋め立て陸部としたことが明らかになった。しかしながら、調査範囲が狭いために地業の規模や工法などについては不明な点が多い。

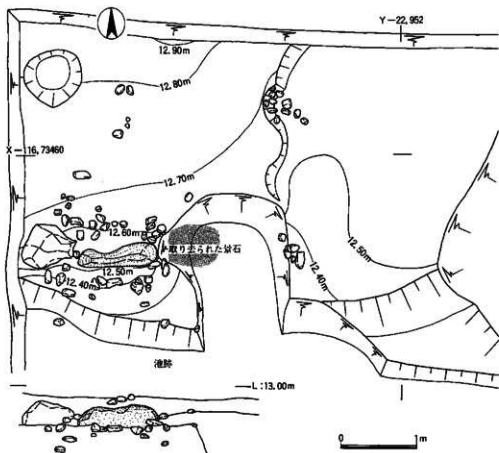


図7 遺構実測図

3 遺物

出土した遺物は、景石周辺部や池内堆積土中より認められた。これらの遺物は土師器、瓦器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦などに分けられる。この他、磨滅した古墳時代の土師器・須恵器、平安時代中頃の灰釉陶器なども数点出土した。

軒丸瓦 (図版18・38)

単弁12弁蓮華文軒丸瓦 (12) 蓮弁の輪郭は凹線で表す。蓮弁は小形でたがいに接し、弁の先端は尖る。大きめの中房に1+4の蓮子を配する。瓦当裏面にはオサエの痕跡が残る。ナデ調整を丁寧に施す。

三巴文軒丸瓦 (2) 右方向に巻き込む巴文で、頭部は瓦当中心で細くなりたがいに接する。尾は細長く引くが凹線に接することはない。巴の断面は台形を呈する。外区には32個の珠文を配する。瓦当裏面・外周は丁寧なナデを施す。焼成良好。播磨産。

三巴文軒丸瓦 (3) 右方向に巻き込む巴文で、頭部は先端が太く短く接する。外区にはやや大粒の珠文を密に配する。巴の尾は細長く引く。瓦当部周辺は丁寧なナデを施す。焼成良好。播磨産。

三巴文軒丸瓦 (4) 右方向に巻き込む巴文で、頭部から尾にかけて急に細くなる。外区にはやや大粒の珠文を密に配する。

軒平瓦 (図版18・38)

均整唐草文軒平瓦 (5) 中心飾りは◎状を呈し、左右に大きく巻き込む唐草は中心飾り上端より伸る。先端の唐草は上へ巻き込む。瓦当接合は包み込み式である。瓦当周辺の瓦当部凹面や顎下端・裏面は丁寧なナデを施す。平瓦部凸面は丁寧になる。凹面には糸切り痕跡や布目痕が残る。焼成良好。播磨産。

均整唐草文軒平瓦 (6) 瓦当の文様構成は(5)と同一であるが、左右に反転する唐草が中心飾りの上部に接しない。左右の唐草は脇に先端が接する。焼成良好。播磨産。

4 まとめ

過去、この付近で実施した発掘調査や試掘調査などでは、鳥羽鎌倉関係の遺構は検出されていない。このため、今回の調査で発見した庭園遺構の広がりや金剛心院関係の園池との関係についても不明な点が多い。また、この庭園遺構がどの一角に含まれるかについては今後の課題である。たとえば、現在金剛心院の東限を考えている溝から外へはずれてしまっている。位置的には馬場殿の東部にあたるが、馬場殿の規模や様子がほとんど不明であるため即断しがたい。

IV 第112次調査

1 調査経過

調査地は鳥羽離宮跡東殿に推定されている地区にあたり、現在の近衛天皇陵の西側、鳥羽天皇陵の南側に位置する。東殿ではこれまで多数の発掘調査が実施され、建物・園池・溝などの遺構が良好な状態で検出されている。第11・86次調査では池の汀線や庭石が検出され、第10次調査では拳大の石を突堤状に積み上げた遺構が見つかった。今回の調査区に隣接した第44・58次調査では庭園と南北溝が検出され、これらの延長が予想された。

調査地はこれまで二筆の水田で、耕土、床土層を重機によって除去した。調査区は残土置場及び拉張の関係で変形のトレンチとなった。当初北側と東側を調査し、反転して西側を調査した。当調査は並行して実施した区画整理道路の調査成果も一部合わせて参照した。

2 遺構

調査地の基本層序は、まず厚さ15cmの現代耕土層があり、次いで褐色砂泥(7.5YR4/4 7.5YR3/4)が20cmで、暗灰黄色砂泥(2.5Y4/1) 20~30cm、黄灰色砂泥(2.5Y4/1 腐植土Ⅰ) 15cmと続く。黄灰色砂泥層からは室町時代の遺物が出土する。池内は暗灰黄色砂泥(2.5Y4/2 腐植土Ⅰ)と黒褐色砂泥(10YR2/3 腐植土Ⅱ)の2層に大別され、上層からは室町・桃山時代の遺物が下層からは平安時代末期の遺物が出土する。

検出された遺構は池(SG1)、溝(SD2・3)、突堤状遺構(SX4)、集石遺構(SX5)がある。

SG1 池の汀線は調査区の北西から南東方向で、南西へ緩やかに傾斜する池の肩口が

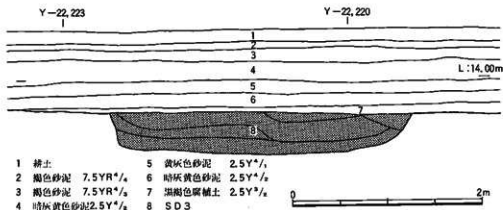


図8 北壁断面図

検出された。この汀は周辺の調査によって明らかになっている東殿の池の北東の岸にあたる。池には調査区の中央付近で張り出しがみられ、出島が設けられている。汀線は緩やかな曲線を描き石を敷き詰め洲浜を形成している。洲浜は、幅約1mで、長さ23mに渡って検出した。しかし、出島を境にして、西側には洲浜が見られるが、東側には作られていない。池の水位は海拔13m 40cm前後と思われる。汀から約3m離れた陸部では0.5×2.0mの庭石が1個検出された。庭石は汀線に沿うように据えられている。石材はチャート系で風化が激しく白っぽくなっている。

SD2 調査区の南東部で検出され、SX4の東側で南北方向の溝である。東の肩部分は調査区外にあたり、溝幅は不明である。深さは20～30cmを測る。

SD3 調査区の北東部で検出された南北方向の溝である。この溝は第58次調査でも検出されており、総延長は39mになる。溝幅は2.5～3m、深さは0.4～0.5mを測り、断面が逆台形を呈する。池に流れ込んで、池と接する箇所に木の枝を杭として4本打ち込み、水量調整を行っている。埋土は2層に大別でき、上層が灰オリーブ色砂泥(7.5Y4/2)、下層がオリーブ黒色泥土(5Y3/1)が堆積していた。上層の土は溝のベースと同様な土で検出が困難な状況であった。溝内からは平安時代後期の土師器皿・瓦器碗・瓦・灰釉陶器が出土した。

SX4 調査区の南東で検出された遺構で、第44次調査や昭和59年度の下水工事にもともなう調査SW57でも関連の遺構が検出されている。SX4も出島と同様に池内に北から張り出して造られ調査区の南東隅で東に直角に折れ曲がる。幅は6m、高さ0.2～0.4mを測る。SX4の工法は外側に杭を打ち、板や竹を絡ませて土留めを行ってから土を盛っている。そしてその中には小さい単位が設けられ杭と板や竹で区切りを行っている。各単位の造られた順番としては南からハ・ニ・ホ・ヘ・トの順に行い、ハ・イ・ロを拡張し北からリ・チを設けている。つまり東からきて北へのびている。土留めに使用した材料は、リ以北は半載した竹を用いているが、チ以南は主に薄い板を使っている。板は厚さ0.5～0.8cm、幅7～9cm、長さ200cmを測る。この板には⊕・⊖の刻印を打ち込んだ物が見られる。各単

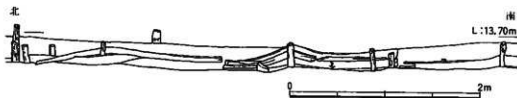


図9 SX4 立面図

位の底部には木の枝・竹の枝・薄板・拳大の石などが集中して出土した。おそらく、SX 4 が造られた当時、池の中であったため、水に浸かった状態で、木や竹の枝を投げ込み作業を行ったものであろう。単位へ・ホは特に多く、単位二にはカマスの中に土器片や箸と供に穀殻を積めたものが5個並んで出土した。各単位の埋土は、細砂や砂泥・泥土とそれぞれ異なった土を入れている。SX 4 からは、土師器皿・瓦器碗など12世紀中頃の遺物が出土している。

SX 5 SG 1 の訂線で検出され東西4.5m、南北5.0mの規模を持つ集石遺構である。石は洲浜に用いられている石と同様な拳大の河原石である。

3 遺物

今回の調査で出土した遺物には、瓦類・土器類・木製品などがある。これらの遺物の時期は平安時代後期のものが大半を占めており、少量の遺物が中世に属する。以下瓦類・土器類・木製品・金属製品の順に述べる。

瓦類 (図版19・39)

出土した瓦類には軒丸瓦16点・軒平瓦19点があり、その他に丸瓦と平瓦がある。平安時代中期に属する軒平瓦が1点みられるが、他はすべて平安時代後期のものである。

蓮華文軒丸瓦(1) 単弁の4弁蓮華文と思われ、花卉は鋭く尖る。各花卉の輪郭線は三つの山形を呈する。瓦当裏面は丁寧なオサエで、頸部には縄タキを残す。焼成はやや軟質で、浅黄橙色である。陸部褐色砂泥より出土。

蓮華文軒丸瓦(2) 中房には蓮子を配するが、数は不明。花卉は剣頭文風を呈する。瓦当裏面は丁寧なオサエで頸部に縄タキを施している。焼成はやや軟質で、色調は淡黄色である。

三巴文軒丸瓦(3) 巴は右に巻き込み断面は丸い。外区には二重の圏線がめぐる。瓦当裏面はオサエのため凹凸がある。瓦当の直径は11.8cmを測る。砂粒はほとんど含まれず焼成良好で灰色を呈する。SG 1水際より出土。

均整唐草文軒平瓦(4) 多くの唐草が反転する唐草文で、外区に界線と珠文を配する。范傷が認められる。頸部から平瓦凸面にかけて丁寧なヘラケズリを施す。焼成良好で硬く、青灰色を呈する。SX 4 (へ) より出土。平安時代中期に属する軒平瓦である。

唐草文軒平瓦(5) 枝葉の先端が二手に別れる唐草文で范が深い。瓦当面にも粗い布目痕を残し、外縁部上端をヘラケズリする。頸部には斜め方向に縄タキがみられ、平瓦部凸面は縦方向のタキを施している。瓦当の成形は折り曲げ式である。焼成は良好で堅

く青黒色。SG1 腐植土Ⅱより出土。山城産と思われる。

均整唐草文軒平瓦(6) 唐草が左右に3反転し、3本ずつ枝葉が派生している。凹面に平行線のヘラ記号がみられ頸部と瓦当裏面に縄タキを残す。平瓦部凸面は糸切り痕と縄タキ。瓦当は折り曲げ手法による。焼成は良好で砂粒少なく、青黒色を呈する。SD2より出土。山城産。

雁巴文軒平瓦(7) 中央に雁形文・左右に三巴文を2つずつ配した軒平瓦と思われる。巴文は内側が右に外側が左に巻き込む。瓦当下端及び側面はケズリを施す。焼成は良好で砂粒少なく色調は淡黄色。SD3より出土。

唐草文軒平瓦(8) 枝葉が飛雲文状を呈する唐草文軒平瓦である。瓦当部上端と下端を横方向に削る。混入物の少ない胎土で焼成は須恵質、色調は明紫灰色。灰褐色砂泥層より出土。

唐草文軒平瓦(9) 唐草は緩やかに反転し、外区に界線と多数の珠文を配する。凹面には細かい布目、凸面及び側面はナデによる仕上げ。砂粒を含み内面は明紫灰色、外面は青黒色を呈する。SG1 底部より出土する。大和産。

宝相華文軒平瓦(10) 内区一面に内厚の半載宝相華文を配している。瓦当の接合方法は平瓦凸面端部に下から直角に粘土を接合し頸部を成形している。瓦当面はケズリの後范を押している。瓦当下端は丁寧なナデ。砂粒は殆ど含まず焼成良好。色調は暗褐色を呈する。SG1 腐植土Ⅰより出土。東海系の軒平瓦である。

唐草文軒平瓦(11) 中心から左右に直線的にのびる唐草に短い枝葉が派生する。断面が三角形の界線が巡る。瓦当の接合方法は(11)と同様。瓦当上端は横にケズリを施し面取りする。瓦当下端・裏面・側面も横方向にケズリを行いなでる。凹面は糸切り痕を残す。釉が全面に施され、特に瓦当面には厚く、唐草の曲部には釉がたまっている。石英粒を多く含み、焼成は良好で色調は灰色に灰緑色の釉がかかる。暗褐色腐植土より出土する。東海系の軒平瓦である。

唐草文軒平瓦(12) 唐草の反転する箇所ですべて1本ずつ枝葉が派生する簡略な唐草文である。瓦当部は(10)と同様な接合方法である。瓦当上端部は横方向にケズリ、瓦当裏面は横方向になでる。凸面は縦方向に縄タキ、凹面は糸切り痕を残す。砂粒は少なく焼成は良好で内面はふい橙色、外面は極暗赤褐色を呈する。SG1 層口腐植土Ⅰ層より出土。

唐草文軒平瓦(13) 中心の1本の茎から左右に3転する唐草文である。瓦当の接合は(10)と同様。瓦当上端・下端・裏面・側面は横方向に削った後なでる。瓦当面の右側と

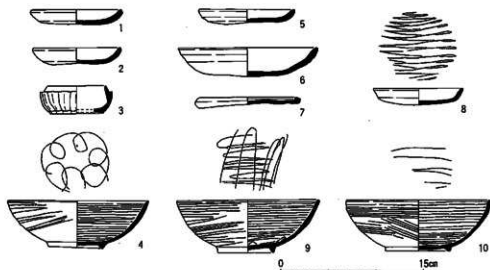


図10 出土土器実測図 (SG1:1 SX4:2~4 SD3:3~10)

平瓦部凹面には施軸している。砂粒が多く含まれ焼成は良好。色調は橙色で緑灰色の釉がかぶっている。SG1肩口腐植土Ⅱより出土。東海系の瓦である。

土器類 (図10)

出土した土器類には、土師器・瓦器・輸入陶磁器等がみられ、大部分が平安時代後期に属するもので、SG1(1)・SX4(2~4)・SD3(5~10)等から出土している。

土師器 土師器には皿があり器形によって大形(4)・小形(1・2・5)・受け皿(7)とに分かれる。(4)は口縁部外面を2段にヨコナデし、口縁端部が外方に開いて丸くおわる。口径14.6cm、器高3.1cm。小形のもの(5)が口縁部外面を2段にヨコナデし、(1)と(2)が幅の広い1段のヨコナデで、口縁端部を丸くおわる。口径9.3~10.0cm 器高1.6~1.8cm。受け皿(2)は平らな底部で内側に強く折れ曲がる口縁部からなる。口径は10.0cm、器高は1.1cmを測る。

瓦器 瓦器には碗(4・9・10)と皿(8)がある。碗(4)は口縁部内側に1条の沈線がめぐり、底部外面には断面三角形の高台が付く。底部内面には螺旋状暗文がみられ、体部内面は丁寧なミガキ、外面は粗いミガキを施す。口径は14.8cm、器高は5.0cmを測る。(7)と(8)は内彎して立ち上がる口縁部で端部は丸くおわる。底部外面には断面台形の高台付き、体部内外面共に密なミガキを施している。(9)は底部内面に格子状の暗文、(10)は平行線の暗文を施す。口径15.0~15.2cm、器高5.4cm。皿(8)は平らな底部

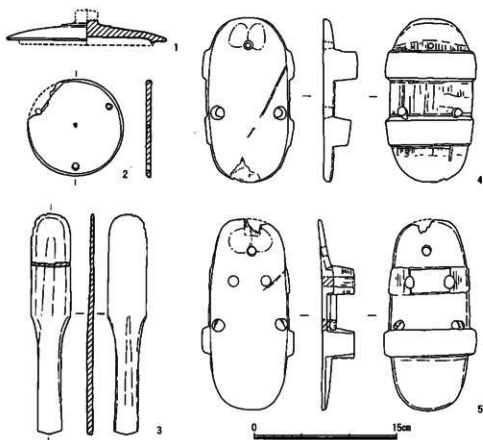


図11 出土木製品実例図 (蓋:1 円盤:2 杓子:3 下駄:4・5)

に外反気味の口縁部で、端部は丸くおわる。体部内面はミガキを、底部内面にはジグザグの暗文を施す。

輸入陶磁器 (3) は型押しで成形された合子の身で、やや上げ底の平らな底部に内彎気身に立ち上がる口縁部とからなる。体部外面に蓋の受け部が付き、口縁端部は鋭い。胎土は白色で体部内面と外面に青白色の釉がかかる。口径は6.1cm、器高は2.9cmを測る。

木製品 (図20～22・40、図11)

木製品は池S G Iや突堤状遺構S X 4から比較的良好な状態で出土した。漆器蓋・下駄・杓子・円盤・五輪塔等がみられる。

蓋 (1) 平らな頂部に段を有しつまみをつけ、口縁部内面にかえりをもつ。横に本取りして、ロクロで丁寧に削った後黒漆を塗っている。口径14.1cm。

円盤 (2) 一部破損しているが3ヶ所に径7mmの孔を穿ち、中央に釘跡らしき孔がみ

られる。端部は一面だけ面取りを行っている。直径10.2cm、厚さ0.6cm。

杓子(3) 長方形の板から把手を削り出したもので、一面が浅く窪み、反対の面が丸みを帯びるように丁寧に削っている。幅4.0cm、長さ23.3cm、厚さ0.4cm。

下駄(4・5) (4)は長円形の台部にやや外方へ広がる歯を削りだし、鼻緒の孔を穿つ。孔は焼けた鉄棒で開けたらしく、焦げ目がある。前の鼻緒の左右には指の痕跡が残っており、又後の歯の方が磨り減っている。幅9.8cm、長さ17.1cm、高さ3.7cm。(5)も(4)と同様な作り方であるが、前歯に2個の孔を穿ち補強のための棒をはめ込んでいる。しかし結果的にはその孔から外側が割れてしまっている。後の鼻緒には半截した棒が詰めこまれている。(5)は(4)より台部が薄く丁寧に削られている。幅9.8cm、長さ20.0cm、高さ3.4cm。

五輪塔(6~39) 五輪塔の部品は池SG1の南東岸にあたる第11次調査で出土しており、今調査でもこれと同様な五輪塔が多数出土した。空・風輪は1木から削り出したもので、他の火・水・地輪はそれぞれ別々に作られ、組み合わせて五輪塔を形成するものである。各々の接合には木釘が用いられ、1~2箇所痕跡を残すものが多い。しかしその木釘の跡も細いものばかりで、はずれ易かったと思われ、組み合せて出土した部品は1点もなかった。釘の痕跡の無いものもみられる。

一木で作った空・風輪は1点(6)のみの出土で、宝珠と請花を刃子状のもので削りだしている。底部には木釘の小孔がみられる。

火輪は四角錐を呈し、頂部を平らに削る。高さの高いもの(7・10・11・13)と低いもの(8・9・12・14)とがあり、軒の反りはほとんどみられない。木釘孔が貫通するもの(7~11・13)と上部だけ(12)、ないもの(14)がある。

水輪(15~28)は樽形を呈するものが多い。(16・17・22)は、上部に孔を穿ち、(18・23・28)は、内部が空洞となっている。(28)は、円筒状である。(20・21・22・27・28)には釘の痕跡が見られないが、他は上下に1~2箇所ずつ孔がある。

地輪(29~39)は方形を呈し、水輪と同様に孔を穿ったもの(29~31)がみられる。(30)と(37)は水輪の痕跡が薄く付いており、組合せを明らかにしている。(29)と(37)は釘孔が貫通している。(36)は側面にも釘が打たれ横にも接続することを示唆している。

これらの五輪塔の類例は元興寺極楽坊にみられ、土壌から多量の五輪塔が出土している。^(註1)
五輪塔は1木で作られ背面や底部に納骨孔が穿たれたもので、納骨五輪塔と報告されている。本調査の場合、組み合わせ式であるが、水輪・地輪に孔があり元興寺と同様の性格の

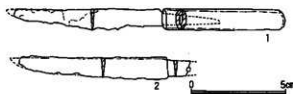


図12 出土刃子実測図

ものであろう。又、本調査例は池などの出土のため時期確定が困難であるが、元興寺極楽坊に先行するものと考えられる。

金属製品 (図12)

出土した金属製品には刃子2点・

古銭1点がある。刃子(1)は刃の幅2.2cm、長さ15.6cm以上で木製の柄がつく。柄は目釘がみられず、差し込んだだけである。(2)は刃の幅2.4cm・長さ15.8cm以上、柄に目釘の孔がある。古銭は宋銭の「咸平元宝」が1点出土した。

4 まとめ

今調査では第11・86次調査と同様の優雅な庭園跡が検出され、そして、池の北東部を調査したことで、池の様相が一層あきらかになった。そしてこれまでの調査では不明であった島の存在が明白となった。島は北側の陸地とつながっており層位的な関係から盛り上げたものと考えられることができる。洲浜は島の西側にのみ設けられ、東側では認められない。これは池が西方に向かって造られていることを示し、池の西方に東殿の主要な建物が存在することが考えられる。

調査区南東部で検出された突堤状遺構は東側に隣接する第44次調査でも見つかっており、直角に折れ曲がっていることが判明した。遺構は近衛天皇陵を囲うようにめぐり、天皇陵と密接な関連性が考えられる。近衛天皇陵は文献にみられる美福門院御塔に御骨を納め御陵としたものである。おそらくこの時に池の中に突堤状遺構を設け、御陵の区画としたものと考えることが可能である。

これまで島羽離宮跡では、卒塔婆・物忌札・仏像・柿経など木製の信仰資料が多数出土しているが、今調査で出土した五輪塔は、これらに資料をさらに加えることができ重要であった。本例も元興寺極楽坊と同様な納骨五輪塔と考えると、出土状況は他の場所に納められた五輪塔を、池に廃棄したことによると思われる。

註1 「元興寺極楽坊総合収蔵庫(第1収蔵庫)建設報告書」 1965年

註2 「百練抄」長寛元年(1163)11月28日の条

「奉渡近衛院御骨於島羽東殿美福門院御塔 本安置加足院御堂」

なお美福門院は、この御塔に納められることはなく、高野山に葬られた。

V 第113次調査

1 調査経過

この調査は、伏見区竹田小屋ノ内町3番地に所在する水田として利用されていたところが、砂利採集工事を始めるにあたって実施されたものである。調査地は、鳥羽離宮田中殿金剛心院の南、馬場殿の東、即ち現在の城南宮の東方にあたる。既往の調査成果をみると、第75・79・92・97・102次調査では、金剛心院の御堂・釣殿廊・園池と滝組み・南北溝などが検出され、第100・101では、金剛心院の南限を画する東西溝・小御堂などの発見があった。また、これらの各調査の下層からは、弥生時代から古墳時代の流路・溝・竪穴住居跡などが発見されていることから、当該地においても、これらに関連する遺構・遺物の検出が予想された。

まず発掘調査に先立って、遺跡の有無を確認するために、試掘調査を実施した。トレンチは、敷地の西・中央・東の3ヶ所に南北方向を、西側の北・南の2ヶ所に東西方向の幅2mのものを合計5ヶ所設置した。その結果、鳥羽離宮期に関連すると考えられる東西方向の段状遺構と、東西方向の落ち込み、溝などを確認したことから本調査が実施される運びとなった。調査区は、敷地全体をその対象としたが、土置き場などから東西48m、南北29.5m、幅10~15m矩形を呈するものである。そして、機械力により、江戸時代以降の層を排土したのちに調査を開始した。

2 遺構

基本層序

調査区内の層序は、北端部とその南側とでは様相が異なっている。それは、まず鳥羽離

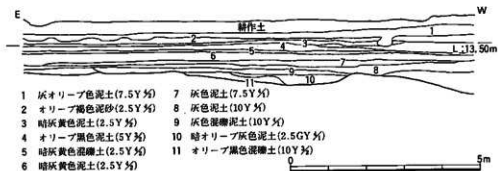


図13 調査区南壁断面図

宮期の遺構面を形成している砂礫層の標高が北端では、13.3m、南端で12.7mを測り、その落差が70cmとかなりの傾斜面となっていることがあげられる。また、この上面を覆う整地層が北端部では、しまった層であるのに対し、南部では、遺構廃絶後、耕作に関係する耕土・床土などの厚い層をなし対象的である。

ここでは、調査区の大部分共通した層位が認められた南側の基本層序を述べる。まず現地地表下には厚さ20cmの耕作土と厚さ20cmの灰オリーブ色泥土(7.5Y4/2)が認められる。次いで厚さ5cmのオリーブ褐色泥砂(2.5Y4/3)、厚さ10cmの暗灰黄色泥土(2.5Y4/2)、厚さ15cmのオリーブ黒色泥土(5Y3/2)となる。この下には小礫を均一に含む暗灰黄色混礫土(2.5Y4/2)の堆積が認められ、厚さ20cmの暗灰黄色泥土(2.5Y4/2)、厚さ15cmの灰色泥土(10Y4/1)、厚さ10cmの灰色混礫泥土(10Y4/1)となる。これより以下は、平安時代中期以前の遺物を含む流路の堆積層と考えられる明赤褐色砂礫(5YR 5/8)と砂の互層となり、この面にて鳥羽離宮期の遺構群を検出した。なお、この層上面を覆っている灰色混礫泥土は、遺構廃絶後流路氾濫の際に堆積したものと考えられる。

遺構の概要

今調査において検出した遺構には、溝・池状遺構・土壇状遺構などがあり、鳥羽離宮の主要伽藍を示すような顕著なものも検出はなかった。これらの時期は、11世紀より13世紀のいわゆる鳥羽離宮期に属する。以下主要な遺構について概略する。

SDI 調査区西部で確認した南北溝である。溝幅は2.2m、深さ1.7mを測り、断面U字形に近い形を呈するものである。溝の方位は、N-21°5'30"-Eと従来得られている鳥羽離宮期の遺構群の振れより大きく東に振れている。溝の堆積は、上層からオリーブ褐色砂礫(2.5Y4/4)、暗オリーブ灰色泥土(2.5GY4/1)、オリーブ黒色混礫泥土(10Y3/

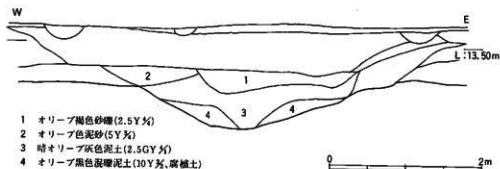


図14 SDI北壁断面図

2、腐植土)となり、南に下るに従い、最下層の砂礫の含む割合が減少する反面、腐植土の堆積が厚くなる傾向にある。この層からやや多くの遺物が出土した。

SD2 調査区西部中央で一部分確認した東西溝で、その東端はSD1に合流している。溝幅は2.1m、深さ0.5mを測り、断面は逆台形を呈する。溝の方位は、ほぼN-90°-EでSD1と異なる。堆積は上層から灰色砂泥(7.5Y 4/1)、灰色泥土(7.5Y 4/1)、オリブ黒色泥土(10Y 3/1、腐植土)とSD1同様下層に腐植土の堆積が確認された。

SG3 調査区西南隅で一部分確認した池状遺構である。調査範囲内での確認できた長さは5m、深さ80cmを測り、北肩は急傾斜をもつ。堆積は、上層から灰色混小礫泥土(10Y 5/1)、灰色泥土(10Y 4/1)、暗オリブ灰色土(2.5GY 4/1)で、上層の北肩付近からまとまって瓦が出土した。

SK4 調査区西部中央SD1の東側で検出した土壌状遺構である。規模は径1.4m、深さ20cmを測り、ほぼ円形を呈する。埋土は暗オリブ灰色泥土(2.5GY 4/1)で、ほとんど遺物の出土は認められなかった。

SG5 調査区南端で確認した池状遺構である。基本的にはSG3と同一のものと考えられるが、その関連は調査範囲内では不明であり、かつ肩の形態が異なっていることから別の遺構とした。長さは40m、深さは40cmを測り、SG3と比べて浅く、また肩も緩やかに立上がっている。肩部には小石を敷いたような痕跡は認められなかった。堆積は上層から灰色泥土(10Y 4/1)、オリブ褐色泥土(2.5Y 4/4)である。

SD6 調査区南部SG5の北側で検出した溝である。溝の方位は、一定せず屈曲した形状を取って、北東から南西に向かって緩やかに弧状を描いている。溝幅は90cm、深さ10cmを測り、浅い。調査区西南部にて溝は消滅する。埋土は、オリブ黒色泥砂(7.5Y 3/2)で遺物は少量出土したにすぎない。

SK7 調査区西部中央SD1東でそれに接するように確認した土壌状遺構である。東西幅は2.3m、南北幅80cm、深さ25cmを測り、不定形を呈する。底部は平坦ではなく、断面はU字形に近い形を呈する。埋土は、上層が褐色砂泥(7.5YR4/4)、下層が黄灰色砂(2.5Y 4/1)となり、少量の土器小片が出土したにすぎない。

3 遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱で14箱と調査面積に比べて出土量は少ない。出土した遺物には、瓦類・土器類・石製品・鉄製品・木製品・自然遺物などがあり、瓦類がほぼその半数を占める。今回の調査では、土壌・溝などから良好な一括資料は認められな

ったが、SD1・SG3からはある程度まとまって瓦類が出土した。

軒丸瓦・軒平瓦（図版23・41）

複弁8弁蓮華文軒丸瓦（1） やや簡略化複弁の蓮華文である。瓦当面は半円形に盛り上がり、中房の蓮子は外縁面より突出する。中房は大きく表現され大粒の蓮子1+5配する。蓮子は中央のものが大きく廻るものはやや小粒である。蓮子は、蓮弁と蓮弁の間に対応するように配されている。蓮弁は接することなく、弁の外側を蓮弁の輪郭にそって凸線で縁どる。珠文は大粒で16個配する。瓦当部は厚く仕上げられ、瓦当表面・外周は丁寧なナデを施す。焼成良好。播磨産。

三巴文軒丸瓦（2・4） 右方向に巻き込む三巴文である。巴は細長く尾も長く引く。巴の頭部は瓦当中央で互いに接するが、尾は圏線や他の巴に接しない。巴の断面は台形を呈する。内区と外区を分ける界線は太く、断面は台形を呈する。外区の珠文は大粒で密に配されている。珠文は35個廻る。瓦当は厚く、瓦当部外周・裏面は丁寧なナデを施す。焼成良好。播磨産。

三巴文軒丸瓦（3） 右方向に巻き込む三巴文で、文様の構成、珠文の数は2と同様である。内区と外区を分ける界線は細い。成形手法も2と同様である。焼成良好。播磨産。

均整唐草文軒平瓦（5） 中心飾りは∞字状を呈し、左右に反転する唐草は中心飾り上端に接する。中心飾りに近い唐草は巻き込みが強い。先端の唐草は左右とも上方に巻く。瓦当部凹面から平瓦部凹面にかけてはやや粗い横方向のナデを施す。顎下端から表面にかけて丁寧な横方向のナデを施す。瓦当の接合は包み込み式である。焼成は良好。播磨産。

均整唐草文軒平瓦（6・7） 文様構成は5と同様であるが、左右先端の唐草は途中で脇に接する。瓦当外周及び顎は丁寧な横方向のナデを施す。瓦当接合は包み込み式である。焼成は良好。播磨産。

均整唐草文軒平瓦（8） 瓦当の中心下端より上へ伸びる唐草は左右に分かれる。三反転する唐草は途切れることなく展開し、枝葉は強く巻き込まない。瓦当部上端は横方向にヘラケズリをする。顎下端は縦方向に縄叩きを施す。顎裏面は丁寧なオサエで仕上げる。焼成は良好。山城産。

土器類

土器類には、弥生時代から江戸時代までのものが出土し、平安時代後期から鎌倉時代までのものが量的に一番多い。これらの遺物は検出した遺構群より出土しているが、その内訳は、土師器が破片数での統計が一番多く、次いで須恵器・瓦器・陶器となる。各土器群

の器形分類での特徴は、土師器では皿が圧倒的多数を占め、須恵器では、壺・甕などの食膳具以外のものが多く、碗・鉢などの出土は極めて少ない。瓦器には、碗・皿の食膳具だけで構成されているが、器種構成上量的な少なさが目立つとともに、鍋・釜類の出土が認められないのは特徴といえる。また、この時期の輸入陶磁器の出土は認められなかった。

一方、平安時代中期以前の遺物は、流路より出土するが、いずれも小破片でかつ少ない。その中には、土師器杯、須恵器碗・杯・蓋・瓶、黑色土器、緑釉陶器、古墳時代の須恵器、弥生土器などが含まれる。

4 まとめ

調査の結果、鳥羽離宮の主要殿舎を表す顕著な遺構や庭園施設及び貴重な遺物の発見は得られなかったが、これらに付属する遺構とそれに伴う少量の遺物の発見にとどまった。以下、調査によって得られた成果の内、遺構群に関する問題点を述べる。

まず、調査区西部で検出した南北溝SD1についてである。溝の振れは、現在まで得られた鳥羽離宮期の遺構群の方位とは大きく異なることである。このように方位の異なる遺構を既往の調査例からみだすとすれば、東殿園池東で確認した北東から南西に延びる溝があげられる。ただこの溝は園池に付随したものであるが、この溝とSD1は直接関連はなく、かつ東殿園池の如く大規模な園池に付属するかどうかは問題である。ただし、SD1と既往の周辺調査で直接関連が想定できるものとして、第97次調査で確認した金剛心院東限南北溝がある。しかし、この溝をそのまま南に延長するとSD1の北端とは、ずれており、直接にはつながらない。この両者の関係は今後の課題といえる。

次いで、調査区南端で検出した東西方向に延びる池状遺構SG3・5がある。これらは、園池の一部と考えられ、当調査地と道路を挟んだ東でも池の汀線と庭石の一部を確認していることから、同一の園池であると想定でき、この周辺にも庭園遺構が存在していたことを裏付けるものであった。

VI 第115次調査

1 調査経過

調査地は、秋ノ山北方の水田地帯内に位置する。今回の調査は、この水田地の一角を埋め立てて倉庫にする建築計画が提示されたため実施したものである。1983・84年に調査地の北東で実施した第81・95次調査では、池の水際に景石を据え付けた庭園遺構の一部を検出している。また、第95次調査の西隣で実施した第105次調査でも池跡を確認している。

調査は、まず建物建築予定区域内について試掘し遺構の有無を確かめることから開始した。試掘調査の結果、池の水際に景石を据え付けた庭園遺構の一部を確認した。この庭園遺構は、先の調査で検出した遺構と一連のものと考えられた。このため、受益者と京都市埋蔵文化財調査センターが協議し、継続して発掘調査を実施した。

2 遺構

調査の結果検出した遺構は、景石を水際及び陸部に据え付けた庭園遺構の一部である。下層遺構については、一部掘り下げを行ったが自然堆積層が認められただけで遺構は検出されなかった。

庭園遺構は、東西方向に細長く伸びる陸部とその両側に池跡の一部である。陸部は西に高く東へ緩やかに傾斜する。また、幅も西側では14mを測る。景石は、調査区北西の水際に4個、水際からやや上にあがった陸部に2個据え付けられていた。石質は水際に据え付

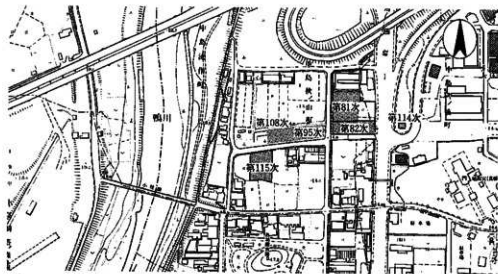


図15 調査区位置図 (1:5,000)

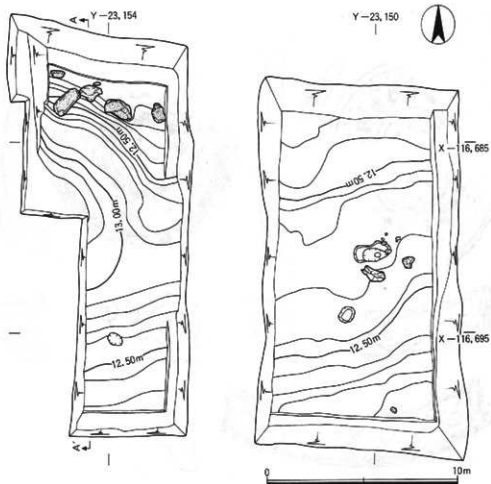


图16 遺構実測図

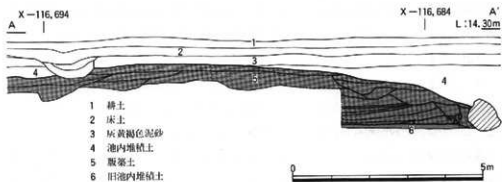


图17 西壁断面図

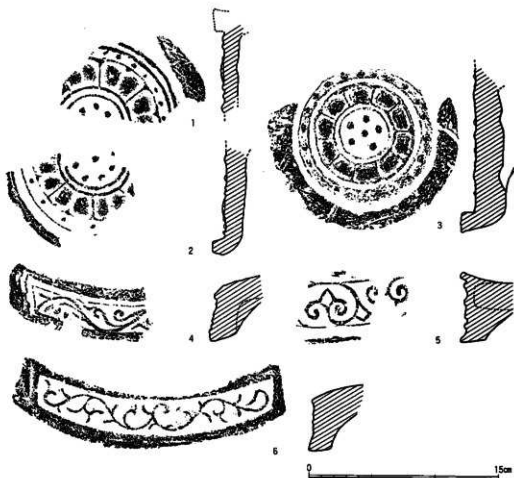


図18 軒丸瓦・軒平瓦拓影実測図

けられていた4個は花崗岩で、他のものはチャートである。池の推定水位は、第95次調査や今回検出した水際の景石の高さなどから12m 40cm前後と考えられる。陸部は、旧地形を削り出して成形したものでなく、平安時代中頃や古墳時代の遺物を含む土を用いて池内に盛り上げたものである。

3 遺物

遺物は池内堆積土や陸部構築土から、古墳時代や平安時代の土器・瓦などが若干出土した。ここでは、比較的残存状況の良好な遺物についてのみ図示した。

複弁8弁蓮華文軒丸瓦(1) 簡略化された蓮華文で、弁はたがいに接する。中房は盛りあがらず凸線で表す。蓮子は1+8と思われる。蓮弁は中房の外側に巡る別の凸線で接

する。珠文は子粒で密に配されている。外区に二重の圏線が巡る。瓦当は薄く仕上げられている。焼成は軟質である。播磨産。

複弁8弁蓮華文軒丸瓦(2) 蓮弁や中房の表現は1と同様である。外区の珠文は1より少なく、弁と弁の接点、弁の中央に合わせて配している。外区には圏線が巡らない。瓦当は薄く、焼成は軟質である。播磨産。

複弁10弁蓮華文軒丸瓦(3) 文様の構成は基本的に2と同様であるが、蓮弁の簡略化が進み複弁と単弁の判別はつきにくい。中房はやや小さく1+5の蓮子を配する。珠文帯の幅に比較してやや大粒の珠文を配する。珠文は各蓮弁に対して2個配されている。范の摩滅が著しく文様が鮮明でない。瓦当は先の2例より厚く仕上げられている。瓦当裏面は円形に強く押さえたのか、あるいは強くなでたために中央が蛇の目風になっている。焼成は良好。播磨産。

唐草文軒平瓦(4) 緩やかに伸びる主葉から発生する枝葉は、巻き込むものと先端が二股に分枝するものがある。脇には范縁の痕跡をとどめる。顎下端には縄タキを残す。顎裏面はオサエの痕跡をとどめる。瓦当成形は折り曲げた後裏面に粘土を補充する。焼成良好。山城産。

唐草文軒平瓦(5) 大きく巻き込む各唐草は、先端が2つに分枝し強く巻く。分枝点には直線的に伸びる枝葉が接し三角形を呈する。瓦当部凹面及び顎は丁寧な横方向のナデを施す。瓦当接合は包み込み式である。焼成良好。播磨産。

唐草文軒平瓦(6) 瓦当中央から左右に伸びる唐草は緩やかに展開し、各枝葉はあまり巻き込まない。左側主葉の先端は二股に分かれるが右は内側に巻き込むだけである。左脇には范縁の痕跡をとどめる。顎下端は横方向のケズリを施す。焼成はやや軟質。山城産。

4 まとめ

秋ノ山の北側に造営されたと考えられる北殿跡の調査は、昭和35年度に行った第1次調査以降から昭和56年度までほとんど実施されていない。北殿関係の遺構と考えられるものが初めて検出されたのは昭和57年度に行った第81次調査で、庭園遺構の一部を検出した。また、昭和59年度に実施した第95次調査でも庭園遺構を発見している。北殿推定地における庭園遺構の検出例は、今回で3例になる。第81次調査は北から南に下がる池の汀と景石を発見した。第95次調査では池の中へ北から南に突き出した陸を検出した。そして、汀には人頭大の河原石を汀に一列並べたり、チャート質の景石を据え付けた痕跡を確認している。今回の調査では池の一部を粗い版築状の土盛りで陸とした箇所を明らかにした。この陸が

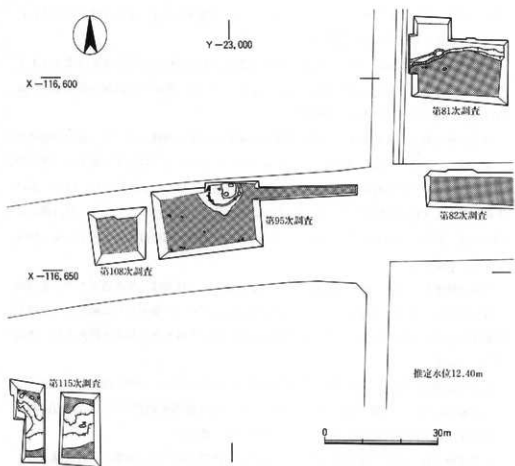


図19 調査区配置図

池に浮かぶ島状の形態を示すか、それとも池に張り出す半島状のものなのかについては今後の課題である。また、陸部の北側で検出した花崗岩の景石は南からは見ることができず西あるいは北から望むことを意識して据え付けたものと考えられる。しかしながらこのような庭園遺構もまだ点の段階であり規模や形態についてはほとんど明らかでない。それに庭園遺構と対をなす建物跡も見えていない。庭園の造営にはかなりしっかりとした工法が見受けられることや景石の数も多く、これらの庭園遺構の周辺部には、かなり大規模な建物跡が造営された可能性が極めて高い。

Ⅶ 第112次調査の種実・樹種分析

1 汀線付近の植物種実の調査

鳥羽離宮第112次調査で出土した池の汀線は、推定東殿の庭園の一郭にあたっている。東殿の庭園遺構はこれまでの第11・44・86次の調査によって園池の一部である池の汀線などが明らかとなっている。また第11次調査では汀線付近に根株が遺存しており、マツ、カエデの存在が推定された。第86次調査では、汀線沿いに敷かれた玉石の直上に堆積した腐植土層中からマツ、ヒメビシ等を検出した。第112次調査では南に池を望む池の汀線遺構を調査区の西端から東方へむけて約25m確認しており、これまでの調査例からしても、この園池には多種類の樹木が植栽されていたことが推定できた。汀線付近の層位の詳細については遺構の章に譲るが、汀線をなす付近は玉石が敷かれ、その直上に植物質を多量に

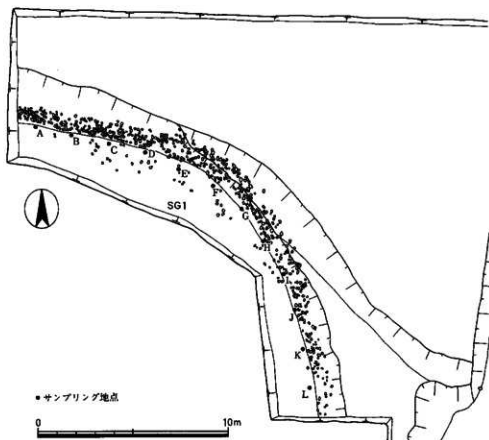


図20 SG1植物遺体採集地点

含む土層が堆積していた。調査担当者によれば、この土層は池のごく初期の堆積物であるとのことなので、この堆積層に含まれる植物遺体を分析し、池の周囲に植栽されていたと考えられる植物を推定した。

植物遺体を多量に含む層は、玉石を敷いた列よりもやや池よりの、推定では水面下10cm程の地点にあたる。この最も多く植物質が堆積する層で、西壁から1mの地点から東へ2m間隔で土を2ℓ（20cm×20cm×5cmの深さをめどとして）ずつ採取した。採取した土を1mmメッシュの篩で水洗いし、残滓の中から植物種実、葉、枝を拾い出した。そのうち今回は種実だけを分析の対象とし、実体顕微鏡下で同定を行った。なお拾い出した植物遺体はすべてアルコール中に漬けて保管している。

分析の結果、木本11科13種、草本23科29種を確認した。結果を表1・2、5・6図版28に示した。まず木本から見てゆく。

木本

アカマツ (*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.)

穂果、種子、葉がG・H・I・J・Lの5地点で出土している。ここで特にアカマツとした理由は、穂果が小型であること、葉が二葉でしかも太さが1mm以下と繊細であることによる。第86次調査では、葉が大変太く先端が鋭いものがでており、これをクロマツと考えると、今回のものはアカマツと特定するのが良いと考えた。

ヤマモモ (*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.)

E・F・G・Iの4地点で検出した。これまで鳥羽離宮内の庭園関係の植物遺体を調査した中でヤマモモの核は全く初の出土である。ヤマモモは暖地性の植物で、実は食用となる。汀線がやや南東にカーブする地点からの出土量が多いのは、この近くの陸部にヤマモモがあったことをうかがわせる。雄雄異株である。興味深いのは、推定東殿の一部とされる第77次調査の井戸内から、多量のヤマモモの核が出土していることである。この時の出土状態は、食用植物が多量に出土し、特にヤマモモは硬いはずの核が細かく割られていた。

ハンノキ (*Alnus Japonica* (Thunb.) Steud.)

Eの地点で穂果が1点出土した。穂果及び種子は推定金剛心院池跡（第97次調査）で多量に、しかも広範囲にわたって出土している。ハンノキは本来湿地を好む樹木である。現在の庭園に植樹する樹木としてはおよそ連想できないものであるが、鳥羽離宮の庭園がそれぞれ非常に広大であることや、庭園の池がもともと湿地を利用して作られている部分が多かったとされることからすると、離宮造営以前から、当地に繁茂していたハンノキがそ

表1 池SG1汀線検出の植物遺体(木本)

番号	科名	和名	出土部位	学名
1	マフ	アカマツ	徳果	<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.
2	ヤマモモ	ヤマモモ	核	<i>Myrica rubra</i> Sieb. et Zucc.
3	カバノキ	ハンノキ	徳果	<i>Alnus japonica</i> (Thunb.) Steud.
4	ニレ	ムクノキ	核	<i>Aphananthe aspera</i> (Thunb.) Planch.
5	ニレ	エノキ	種子	<i>Celtis sinensis</i> Persoon.
6	クワ	カジノキ	種子	<i>Broussonetia papyrifera</i> (L.) Vent.
7	バラ	ウメ	核	<i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.
8	バラ	サクラ亜属	核	<i>Prunus</i> sp.
9	ミカン	イヌザンショウ	種子	<i>Fagara ailanthoides</i> (Sieb. et Zucc.)
10	センダン	センダン	核	<i>Melia Azedarach</i> L.
11	カエデ	カエデ属	果実	<i>Acer</i> sp.
12	ブドウ	ブドウ属	種子	<i>Vitis</i> sp.
13	カキノキ	カキノキ	種子	<i>Diospyros Kaki</i> Thunb.

学名は「日本植物誌」至文堂、「原色日本植物図鑑・木本編」保育社による。

表2 池SG1汀線検出の植物遺体(草本)

番号	科名	和名	出土部位	学名
14	タデ	ギシギシ	果実	<i>Rumex</i> sp.
15	タデ	タデ	果実	<i>Polygonum</i> sp.
16	ヒユ	イヌビユ?	種子	<i>Amaranthus lividus</i> L.?
17	スベリヒユ	スベリヒユ	種子	<i>Portulaca oleracea</i> L.
18	ナデシコ	ハコベ	種子	<i>Stellaria</i> sp.
19	キンボウゲ	タガラシ	そう果	<i>Ranunculus sceleratus</i> L.
20	キンボウゲ	キツネノボタン?	そう果	<i>Ranunculus guelphaertensis</i> Nakai.?
21	バラ	ヘビイチゴ?	そう果	<i>Duchesnea indica</i> (Andr.) Focke.
22	カタバミ	カタバミ	種子	<i>Oxalis corniculata</i> L.
23	トウダイグサ	エノキグサ	種子	<i>Acalypha australis</i> L.
24	ブドウ	ノブドウ	果実	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> Maxim.
25	ヒシ	ヒメビシ	果実	<i>Trapa incisa</i> Sieb. et Zucc.
26	セリ	チドメグサ	果実	<i>Hydrocotyle</i> sp.
27	シソ	シソ	果実	<i>Perilla frutescens</i> (Linn.) Britton.
28	ナス	ナス	種子	<i>Solanum melongena</i> L.
29	ウリ	ウリ	種子	<i>Cucumis melo</i> L.
30	キク	メナモミ	そう果	<i>Siegesbeckia</i> sp.
31	キク	タカサブロウ	そう果	<i>Eclipta prostrata</i> (L.) L.
32	ミクリ	ミクリ	果実	<i>Sparganium erectum</i> L. p.p.
33	ヒルムシロ	ヒルムシロ	果実	<i>Potamogeton</i> sp.
34	オモダカ	オモダカ	果実	<i>Sagittaria trifolia</i> L.
35	オモダカ	ヘラオモダカ	果実	<i>Alisma canaliculatum</i> A.
36	イネ	イネ	果実	<i>Oryza sativa</i> L.
37	イネ	オオムギ	果実	<i>Hordeum vulgare</i> L.
38	カヤツリグサ	カヤツリグサ	果実	<i>Cyperus</i> sp.
39	カヤツリグサ	ホタルイ	果実	<i>Scirpus</i> sp.
40	ツユクサ	ツユクサ	種子	<i>Commelina communis</i> L.
41	ツユクサ	イボクサ	種子	<i>Murdannia Keiskei</i> (Hassk.) Hand-Mzt.
42	ミズアオイ	コナギ	種子	<i>Monochooria vaginalis</i> (Burm.f.) Presl

学名は「日本植物誌」至文堂、「原色日本植物図鑑・木本編」保育社による。

のまま点景として用いられたと考えることも可能であるかもしれない。

ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch.)

Eの地点より1点出土した。ニレ科植物は鳥羽離宮内の各庭園遺構から出土している。落葉の高木である。ムクノキやエノキの果実は鳥の飼として重要なものであり、従って池の堆積物中から出土する核も、本来庭園に植栽されていたものが池中に落下したものが、鳥の糞によって他所から運ばれたものかは一概に言えない部分もある。

エノキ (*Celtis sinensis* Persoon.)

E・H・K付近から出土した。量は少ない。落葉の高木となる。果実は鳥の飼となる。

カジノキ (*Broussonetia papyrifera* (L.) Vent.)

C・H・Lで1点ずつ出土した。カジノキは鳥羽離宮の庭園遺構からは量は少ないが必ずといって良いほど出土する植物の一つである。平安時代にはカジノキは重要な庭樹であり、七夕にはその大きな葉に和歌を書いたものという。

サクラ亜属 (*Prunus* sp.)

核の形態からは種の特定ができないのでサクラ亜属とした。I地点付近が最も出土量が多い。鳥羽離宮では、ことに核の出土量の多い植物の一つである。印象深いのは白河天皇陵堀(第91次・第96次調査)で多量に出土したことである。ただしここで注意しておかねばならないのは、サクラは現在我々が連想しやすいソメイヨシノのような花が木を完全に覆うようなものではなく、葉が先に出て、それから花が咲くヤマザクラのようなタイプであったと推定する。

ウメ (*Prunus mume* Sieb. et Zucc.)

ウメはI地点でただ一つ出土している。金剛心院の池では何個も一地点から出土した例があった。ウメは本来低木であり、散布範囲もそう広くはなく、このような出土のしかたをするようである。

イヌザンショウ (*Fagara ailanthoides* Sieb. et Zucc.)

D地点で1点出土した。イヌザンショウやカラスザンショウ、あるいはサンショウも良く出土する植物の一つである。現在でも大きな庭園に植えられることがある。

センダン (*Melia Azedarach* L.)

A・Bの2地点をのぞき、各サンプリング地点から出土している。出土量は他の植物よりずっと多い。センダンは紫色の美しい花をつける落葉高木である。鳥羽離宮の庭園遺構からは必ず出土する植物で、果実の生産量が相当多い樹木。

カエデ属 (*Acer* sp.)

サンプリング地点の6地点から果実を検出した。最も多いのはG地点の3個であった。カエデの果実の検出例は、これまで数多く行ってきた鳥羽離宮の池の分析でもごくわずかである。これまでの例からすれば、今回は多くはないにしても、これだけの地点からの出土を見たのは例外的とも言える。おそらく、カエデの果実は翼を持っており、樹木からの散布面積が広く、単位面積当たりに落下する果実の量が非常に少ないことや、池に落下しても、水面で浮遊するために検出例が少ないのではないかと想像する。実際にはかなり多くカエデが植栽されていたものと推測する。

ブドウ属 (*Vitis* sp.)

J地点で1点のみ検出した。ブドウの実体がどのようなものであったのかはわからないが、鳥羽離宮ではこれまでも各地で検出している。

カキノキ (*Diospyros Kaki* Thunb.)

B・D・H・I・Jの5地点でそれぞれ1点ずつ検出した。カキノキの種子を鳥羽離宮の池で検出したのはこれが最初である。この種子は、1点を除いてみれば未熟な種子である。未熟ではあるが種子の表面にある微細なシワからカキと判断できる。先にヤマモモの項で第77次調査で分析した井戸からの出土例について触れたが、カキでも同様のことが言え、第77次の井戸から多量にカキノキの種子が出土している。

木本の種実の出土数と出土地点の関係を見ると、E地点付近を中心とする一つのまとまりと、HないしI地点を中心とするまとまりの大きく二つの種実の集中するグループに分けることができる。

E地点付近は、ヤマモモ、サクラ、センダン、カエデを中心とし、HないしI地点付近は、エノキ、サクラ、センダン、カエデ、カキノキを中心とする。樹木を植栽するにあたって庭園全体にバラバラに多種類の樹木を植栽するよりも、いくつかの樹木をまとめて植栽することはよくあることで、今回の種実の分布状況は本来の庭園の樹木の姿を忠実に反映している可能性が高い。

草本

草本22科29種の内訳は、人里植物18科24種、栽培植物4科5種である。人里植物とは道端、空き地、庭さきなどの人間の生活空間の周辺に生活する草本植物を言う。人里植物としたものの中から水辺に植生する植物を選び出すとタデ、タガラシ、キツネノボタン？、ヒメビシ、ミクリ、ヒルムシロ、オモダカ、ヘラオモダカ、ホタルイ、イボクサ、コナギ

の9科11種を数えることができる。これは分析地点が池の汀線付近と言うことで、当然の結果と言える。

残りの14科18種の草本を見てみよう。今回は、表6のように出土地点ごとに種実の出土数を実数で表すのではなく、10以下のものをR、10以上のものを十で表現してみた。この中でイヌビユは、アカザ科(シロザ)を含むものとする。検出した草本の種類を概観してまずわかることは、構成がカタバミなどの草丈の低い草本のみからなっていることである。ところで種実の分析では、池の堆積層をある一定の厚さで採取しなければならず、この層の厚さは即ち、数年あるいはそれ以上の堆積時間を意味するかもしれない。今回の草本分析の結果は、そのような限界の上になおある意味を持っている。即ち、数年あるいはそれ以上の時間にわたる堆積層から草丈のごく低い草本の種実しか検出できなかったことは、この汀線付近が極めて良好に管理が行われていたことを意味する。筆者の経験からすれば、カタバミ、スベリヒユ等が優占する草本の状態にしておく為には、年に数回の除草を必要とし、その除草を怠ればあつという間に草丈の高い草本にとって代わり、しかも多年草へと遷移していくのが普通であるからである。その意味で、この調査地付近の庭園は極めて管理の状態が良かったと言える。

K地点付近において栽培植物のナス、ウリ、イネなどがややまとまって出土している。これが何を意味するかは不明である。

2 SX4使用木材の樹種調査

近衛天皇陵の堀をめぐるための堤の土木工事の内容は、まず仕事の内容の多彩であること、用いられた材料に変化があることなどから大変興味深かった。これまで、平安京の桑坊に關係する溝の護岸工事と、この鳥羽離宮での工事の内容は全く異なるものであった。特に興味をひかれた点は、杭に広葉樹の芯持ち材を多用していることや、区画内に柴が投げ込まれたような状態で検出されたことなどである。平安京から出土する護岸工事では必ず針葉樹を用いており、しかも、丸杭でもおよそその直径が一定であるなど整然とした工事内容であることが多く、その点に大きな違いを認めた。しかも、広葉樹の皮付きの丸杭を多用していることで、この土木工事の行われた季節の推定が可能であることや、杭と柴の関連等、いくつかの興味から用材の樹種の分析・調査を行った。

木材の用いられ方と種類

検出された土木工事の内容は、板材と杭による南北に延びる大きな区画と、その内部をさらに細かく仕切る区画からなる。大きな区画には直径10cm、残存長100cmを最大とする

主として広葉樹中心の丸杭と、長さ200cm、幅9cm、厚さ0.5cmの板材を横材として用いる部分と、マダケを半載して横材として用いる部分からなる。内部の仕切りには、長さが45cm、幅・厚さが1cm～2cmの針葉樹の割り材を杭とし、前述した板材を横材として用いている。そして、いくつかの区画内には束ねた状態の小枝が放り込まれたような状態で底に入っていたり、また、俵が5つおいてある区画もある。この詳細は遺構の項及び図版を参照していただきたい。これらのうち、土木工事に直接関係する用材は以下の通りであった。

- ① 丸杭 114点 (半載して樹皮つきのものを含む)
- ② 角杭 40点 (年輪は平行)
- ③ 板材 127点
- ④ 槌 1点

樹種の調査結果

木材の木口、柀目面、板目面からカミソリで切片を作り顕微鏡下で樹種の調査を行った。同定の結果を表3と図版で示す。

同定できたのは針葉樹4科6種、広葉樹9科11種。計13科17種、不明13種である。以下に樹種と木材の点数を部材ごとに記す。

外区をなす土木工事のうち104本の杭には取り上げ番号が付されている。この番号は、堤の工事の西面の南端の杭を№1とし、西面北方向へ№61までである。つづいて、南面の西

表3 SX4木材の樹種

丸 杭		角 杭	板 材
針葉樹	広葉樹		
モミ 3点	ヤナギ(属) 4点	スギ 37点	スギ 127点 (板材の全部)
ツガ 3点	ノグルミ 9点	ヒノキ 3点	
二葉マツ 6点	ハンノキ 2点		
スギ 3点	シイノキ(属) 21点		
コウヤマキ 4点	アカガシ亜属 7点		
ヒノキ 1点	クスギ 4点		
	ムクノキ 8点		
	サクラ亜属 1点		
	ミズキ属 1点		
	サカキ 10点		
	エズリハ属 14点		
	不明 13点		

端から東へ向かって№62～68まで、さらに、東面を北へ№69～104までである。この杭は、最大の直径が10cm、残存長100cmを測り、すべて丸杭で皮付きである。ここで、連続番号で同一樹種のところを上げると、以下の通りである。

表4 SX4杭の大きさ

杭 番 号	樹 種	直 径
33, 34	スダジイ	9.5cm, 7.5cm
35, 36	サカキ	8.0cm, 10.0cm
41, 42	ハンノキ	6.8cm, 7.1cm
45, 46	ノグルミ	6.2cm, 6.6cm
62, 63, 64	ユズリハ	6.5cm, 7.4cm, 6.0cm
77, 78	スダジイ	5.4cm, 5.8cm
80, 81, 82	ノグルミ	8.4cm, 8.0cm, 6.2cm
84, 85	クスギ	6.9cm, 5.2cm
86, 87	ユズリハ	3.4cm, 2.9cm
89, 90, 91, 92	ムクノキ	5.2cm, 5.5cm, 2.7cm, 2.9cm (91・92は枝)

材の直径がそれぞれにおいて近似しており、樹皮の様子からしても同一木材から作りだした杭である可能性が極めて高い。

杭と内区に放り込まれた小枝の関係

中仕切りの中央付近におかれた枝は、松葉が付いていたこと、枝が輪生であることから樹齢の若い松の先端部であることがわかる。そして、この土木工事の杭に樹齢の若い松（二葉）が使用されていることからこの枝は、若い松を切り出して杭にならない先端部を切り捨てたものとみることが出来る。その他の小枝も杭を取り不要になった先端部や枝を土木工事の際にすべて投棄したものとみるのが妥当である。

土木工事の季節推定

この土木工事がいつの季節に行われたかは大変興味のあるところである。幸いなことに、この工事には100本にものぼる樹皮つき、あるいは樹皮は取れても年輪の最端部が残っている杭がある。これらの杭の中には樹木の性質から年輪の不明瞭なもの（常緑樹は多くがそうであり、この杭の多くは常緑樹である）が多いが、中にはクスギなどの環孔材もあり、それらははっきり年輪を読み取ることが出来る。今、すべての杭について調査したわけではないがこの中からマツ、クスギ、アカガシ亜属等年輪の明瞭なものを選び出しその木口の樹皮と年輪の境界部の調査を行った。（図版28）その結果、すべての年輪が晩材部が生成され、しかもまだ早材部が形成されていない様子を示していた。このことは、この樹木がほぼ活動を停止している季節に伐採されたことを意味している。これは、冬期で、まだ活動が盛んになる前に伐採が行われたことを意味する。堤の最下部に松の先端部や小枝、

ごく細い柴が多数投棄された状態であることから、この土木工事は必要な資材を集めてすぐに工事を行ったとみるのが妥当であろう。杭に用いられた木材が伐採後すぐに用いられたものと仮定すれば、この土木工事は冬期間に行われたとすることができる。冬期は池の過水期にあっており、池の水位も下がり、工事を行う条件が整ったのであったろう。

用材の調達範囲

最初にも述べたことであるが、平安京の道路側溝などの工事の際に用いられる杭は規格品とも言えるものである。それに対して、この土木工事では針葉樹・広葉樹を構うことなく用いている。しかも、杭はせいぜい10年生の樹木からなっている。広葉樹の内容が多様であることなどを考えると、ごく付近に林があり、その林の樹木を伐り出して用いたような印象を持った。その理由として、針葉樹が杭全体の20%に満たないことや、常緑広葉樹を多用していることが上げられる。しかも、杭の中にはヤナギも含まれており、これなどは、鳥羽離宮の広大な池の周囲で管理のあまり行き届いていないところから調達してきた可能性もある。

3 木製品の樹種調査

第112次調査において木製の五輪塔、下駄、漆器等が出土した。その樹種を顕微鏡下で調査した結果5科5種を認めた。結果は表8の通りである。分析の根拠を簡単に述べる。

カヤ 材は均質緻密で年輪界はゆるやかである。樹脂細胞を欠き、螺旋肥厚が顕著である。

スギ 年輪界が明瞭で、樹脂細胞を持つ。分野壁孔はスギ型である。五輪塔はスギで作られたものが最も多い。

ヒノキ 年輪界の夏材部が狭く、分野壁孔は典型的なヒノキ型である。五輪塔の各部と下駄、板状木製品等がある。

ケヤキ 環孔材である。大道管、単穿孔を持つ。平安京や鳥羽離宮跡から出土する漆器で黒漆塗りの上質なものにはケヤキが多い。

表5 池SG1堆積物に含まれる木本種実

番号	科 目	和 名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
1	マツ	アカマツ							2	2(種子)	1	2		1
2	ヤマモモ	ヤマモモ					4	1	2		1			
3	カバノキ	ハンノキ					1							
4	ニレ	ムクノキ					1							
5	ニレ	エノキ					1			1.5	1.5		1.5	1.5
6	クワ	カジノキ			1					1				1
7	バラ	サクラ亜属				1	4		2	1	4	3	1	1
8	バラ	ウメ									1			
9	ミカン	イスザンショウ				1								
10	センダン	センダン			1	1	3	1	13.5	4	6	4	4	2
11	カエデ	カエデ					1		3	1	1	1	1	
12	ブドウ	ブドウ属										1		
13	カキノキ	カキノキ		1		1				1	1	1		

(数字は検出数を示す)

表6 池SG1堆積物に含まれる草本種実

番号	科 名	和 名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
1	タデ	ギシギシ												R
2	タデ	タデ(属)	R											
3	ヒユ	イヌビユ	+	+	+			R	R	+		R	R	
4	スベリヒユ	スベリヒユ	R					R		R			R	
5	ナデシコ	ハコベ(属)		R				R			R		R	R
6	キンポウゲ	キツネノボタン	R		+					R			R	
7	キンポウゲ	タガラシ	R		+	+	R		R	R		+	+	+
8	バラ	ヘビイチゴ	R	R									R	
9	カタバミ	カタバミ	R	+	+	R		R	R	R	+	+	+	+
10	トウダイグサ	エノキグサ					R						R	
11	ブドウ	ノブドウ									R			
12	ビシ	ヒメビシ			R		R		+	R	+	+		
13	セリ	チドメグサ	R	R						R		R		R
14	キク	タカサブロウ				+						+		R
15	キク	メナモミ(属)		R										R
16	ミクリ	ミクリ								R		+		
17	ヒルムシロ	ヒルムシロ		R	R	R	R				R			
18	オモダカ	オモダカ			R	R			R	R	+	R	R	+
19	オモダカ	ヘラオモダカ	R									R		
20	カヤツリグサ	カヤツリグサ		+	+	R	R	R	R	R		R	R	
21	カヤツリグサ	ホタルイ											R	
22	ツユクサ	ツユクサ			+									
23	ツユクサ	イボクサ		R	+	+	R		+		+	R	R	+
24	ミズアオイ	コナギ											R	+
25	シソ	シソ			+	+	R			R	+	R	R	R
26	ナス	ナス	R	R	+				R	R	R	R	R	R
27	ウリ	ウリ	R	R					R		R	R	R	R
28	イネ	オオムギ							R					
29	イネ	イネ									R		+	+

(+: 10以上, R: 10以下)

表7 S X 4 樹種調査結果

No.	部材	樹種	No.	部材	樹種	No.	部材	樹種	No.	部材	樹種
001	杖	不明広葉樹	048	杖	二葉マツ	095	杖	スギ	142	杖	スギ
002	杖	不明広葉樹	049	杖	シノキ	096	杖	コウヤマキ	143	杖	スギ
003	杖	シノキ	050	杖	ノグルミ	097	杖	不明広葉樹	144	杖	スギ
004	杖	不明広葉樹	051	杖	シノキ?	098	杖	モミ	145	横板	スギ
005	杖	コウヤマキ	052	杖	ヤナギ属	099	杖	シノキ	146	横板	スギ
006	杖	不明広葉樹	053	杖	サカキ	100	杖	ヒノキ	147	横板	スギ
007	杖	シノキ	054	杖	ユズリハ	101	杖	シノキ	148	横板	スギ
008	杖	不明広葉樹	055	杖	サクラ亞属	102	杖	モミ	149	横板	スギ
009	杖	ユズリハ	056	杖	アカガシ亞属	103	杖	ヤナギ属	150	横板	スギ
010	杖	ユズリハ	057	杖	シノキ	104	杖	ユズリハ	151	横板	スギ
011	杖	ムクノキ	058	杖	不明広葉樹	105	杖	スギ	152	横板	スギ
012	杖	サカキ	059	杖	シノキ	106	杖	スギ	153	横板	スギ
013	杖	クスギ	060	杖	サカキ	107	杖	スギ	154	横板	スギ
014	杖	シノキ	061	杖	シノキ	108	杖	スギ	155	横板	スギ
015	杖	ユズリハ	062	杖	サカキ	109	杖	スギ	156	横板	スギ
016	杖	シノキ	063	杖	ユズリハ	110	杖	スギ	157	横板	スギ
017	杖	シノキ	064	杖	ユズリハ	111	杖	スギ	158	横板	スギ
018	杖	ノグルミ	065	杖	サカキ	112	杖	ユズリハ	159	横板	スギ
019	杖	二葉マツ	066	杖	ユズリハ	113	杖	スギ	160	横板	スギ
020	杖	シノキ	067	杖	ツガ	114	杖	スギ	161	横板	スギ
021	杖	アカガシ亞属	068	杖	ノグルミ	115	杖	スギ	162	横板	スギ
022	杖	サカキ	069	杖	シノキ	116	杖	ツガ	163	横板	スギ
023	杖	ミズキ	070	杖	ムクノキ	117	杖	ヒノキ	164	横板	スギ
024	杖	アカガシ亞属	071	杖	アカガシ亞属	118	杖	ヒノキ	165	横板	スギ
025	杖	二葉マツ	072	杖	ツガ	119	杖	ヒノキ	166	横板	スギ
026	杖	アカガシ亞属	073	杖	ムクノキ	120	杖	スギ	167	横板	スギ
027	杖	ユズリハ	074	杖	ユズリハ	121	杖	スギ	168	横板	スギ
028	杖	クスギ	075	杖	ユズリハ	122	杖	スギ	169	横板	スギ
029	杖	コウヤマキ	076	杖	アカガシ亞属	123	杖	スギ	170	横板	スギ
030	杖	サカキ?	077	杖	シノキ	124	杖	スギ	171	横板	スギ
031	杖	二葉マツ	078	杖	シノキ	125	杖	スギ	172	横板	スギ
032	杖	コウヤマキ	079	杖	アカガシ亞属	126	杖	スギ	173	横板	スギ
033	杖	シノキ	080	杖	ノグルミ	127	杖	スギ	174	横板	スギ
034	杖	シノキ	081	杖	ノグルミ	128	杖	スギ	175	横板	スギ
035	杖	サカキ	082	杖	ノグルミ	129	杖	スギ	176	横板	スギ
036	杖	サカキ	083	杖	ムクノキ	130	杖	スギ	177	横板	スギ
037	杖	シノキ	084	杖	クスギ	131	杖	スギ	178	横板	スギ
038	杖	不明広葉樹	085	杖	クスギ	132	杖	スギ	179	横板	スギ
039	杖	不明広葉樹	086	杖	ユズリハ	133	杖	スギ	180	横板	スギ
040	杖	ヤナギ属	087	杖	ユズリハ	134	杖	スギ	181	横板	スギ
041	杖	ハンノキ?	088	杖	不明広葉樹	135	杖	スギ	182	横板	スギ
042	杖	ハンノキ?	089	杖	ムクノキ	136	杖	スギ	183	横板	スギ
043	杖	シノキ	090	杖	ムクノキ	137	杖	スギ	184	横板	スギ
044	杖	ヤナギ属	091	杖	ムクノキ	138	杖	スギ	185	横板	スギ
045	杖	ノグルミ	092	杖	ムクノキ	139	杖	スギ	186	横板	スギ
046	杖	ノグルミ	093	杖	サカキ	140	杖	スギ	187	横板	スギ
047	杖	スギ	094	杖	モミ	141	杖	スギ	188	横板	スギ

189	横板	スギ	213	横板	スギ	237	横板	スギ	261	横板	スギ
190	横板	スギ	214	横板	スギ	238	横板	スギ	262	横板	スギ
191	横板	スギ	215	横板	スギ	239	横板	スギ	263	枕	シノキ
192	横板	スギ	216	横板	スギ	240	横板	スギ	264	枕	?
193	横板	スギ	217	横板	スギ	241	横板	スギ	265	枕	イグルミ
194	横板	スギ	218	横板	スギ	242	横板	スギ	266	枕	マツ科
195	横板	スギ	219	横板	スギ	243	横板	スギ	267	枕	二葉マツ
196	横板	スギ	220	横板	スギ	244	横板	スギ	268	枕	スギ
197	横板	スギ	221	横板	スギ	245	横板	スギ	269	枕	スギ
198	横板	スギ	222	横板	スギ	246	横板	スギ	270	枕	スギ
199	横板	スギ	223	横板	スギ	247	横板	スギ	271	枕	広葉樹
200	横板	スギ	224	横板	スギ	248	横板	スギ	272	枕	広葉樹
201	横板	スギ	225	横板	スギ	249	横板	スギ	273	横板	スギ
202	横板	スギ	226	横板	スギ	250	横板	スギ	274	横板	スギ
203	横板	スギ	227	横板	スギ	251	横板	スギ	275	横板	スギ
204	横板	スギ	228	横板	スギ	252	横板	スギ	276	横板	スギ
205	横板	スギ	229	横板	スギ	253	横板	スギ	277	横板	スギ
206	横板	スギ	230	横板	スギ	254	横板	スギ	278	横板	スギ
207	横板	スギ	231	横板	スギ	255	横板	スギ	279	横板	スギ
208	横板	スギ	232	横板	スギ	256	横板	スギ	280	横板	スギ
209	横板	スギ	233	横板	スギ	257	横板	スギ	281	横板	スギ
210	横板	スギ	234	横板	スギ	258	横板	スギ	282	枕	アカガシ類
211	横板	スギ	235	横板	スギ	259	横板	スギ			
212	横板	スギ	236	横板	スギ	260	横板	スギ			

表8 出土木製品樹種調査結果

木器番号	器種	遺構	樹種	木器番号	器種	遺構	樹種
01	釜	SD2	ケヤキ	21	五輪塔・水輪	SG1	スギ
02	円盤	SX4	ヒノキ	22	五輪塔・水輪	SG1	ヒノキ
03	杓子	SG1	ヒノキ	23	五輪塔・水輪	SG1	ヒノキ
04	下駄	SG1	ヒノキ	24	五輪塔・水輪	SG1	カヤ
05	下駄	SG1	ヒノキ	25	五輪塔・水輪	SX4	カヤ
06	五輪塔・空・風輪	SG1	スギ	26	五輪塔・水輪	SG1	カヤ
07	五輪塔・火輪	SG1	ヒノキ	27	五輪塔・水輪	SG1	ヒノキ
08	五輪塔・火輪	SX4	スギ	28	五輪塔・水輪	SG1	スギ
09	五輪塔・火輪	SG1	スギ	29	五輪塔・地輪	SG1	スギ
10	五輪塔・火輪	SX4	スギ	30	五輪塔・地輪	SG1	スギ
11	五輪塔・火輪	SG1	スギ	31	五輪塔・地輪	隠部	スギ
12	五輪塔・火輪	SG1	スギ	32	五輪塔・地輪	SG1	スギ
13	五輪塔・火輪	SG1	ヒノキ	33	五輪塔・地輪	SG1	スギ
14	五輪塔・火輪	SG1	ヒノキ	34	五輪塔・地輪	SG1	スギ
15	五輪塔・水輪	SX4	スギ	35	五輪塔・地輪	SG1	ヒノキ
16	五輪塔・水輪	SG1	スギ	36	五輪塔・地輪	SG1	スギ?
17	五輪塔・水輪	SD3	スギ	37	五輪塔・地輪	SG1	スギ
18	五輪塔・水輪	SG1	ヒノキ	38	五輪塔・地輪	SG1	ヒノキ
19	五輪塔・水輪	SX4	スギ	39	五輪塔・地輪	SG1	スギ
20	五輪塔・水輪	SG1	スギ				

圖 版



1 鳥羽離宮跡遠景（東から）昭和60年度撮影



2 金剛心院跡遠景（南から）昭和60年度撮影



1 調査区全景 (東から)



2 瓦出土状況



3 汀線



1 調査地全景（北から）



2 調査地全景（東から）



1 東端石列（北西から）



2 東端石列細部（北から）



3 東端石列細部（南から）



1 石組細部 (東から)



2 石組細部 (東から)



3 南東部埋土断面 (北から)



4 舌状遺構検出状況 (西から)



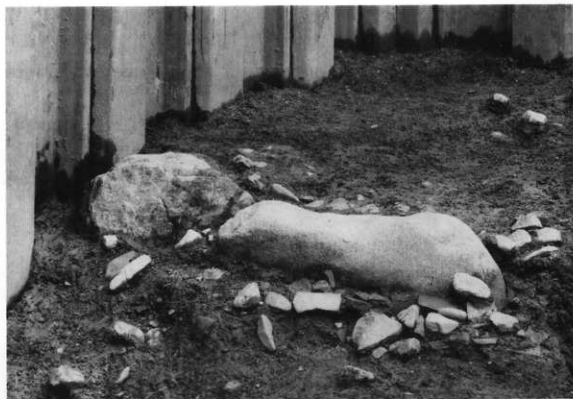
1 南側断割部 (北西から)



2 北側断割部断面 (北から)



1 調査区全景 (南から)



2 景石検出状況 (南から)



調査地遠景（南東から）



1 調査区全景 (西から)



2 調査区北部 (東から)



1 SX 4 (北西から)



2 SX 4 (南西から)



1 SX 4 (北西から)



2 SX 4-り土留め



3 SX 4-ホ土留め



1 SX 4 (南から)



2 SX 4 北部 (南から)



3 SX 4-二土留め



1 SX 4完掘状況



2 SX 4中央部



3 SX 4-2 カマス出土状況



1 調査区南西部（北から）



2 池肩口（南から）



1 調査区全景 (西から)



2 調査区西部 (北から)



1 調査区全景 (北西から)



2 景石検出状況 (北西から)



軒九瓦・軒平瓦



軒九瓦・軒平瓦



1



3



7



9



5



8



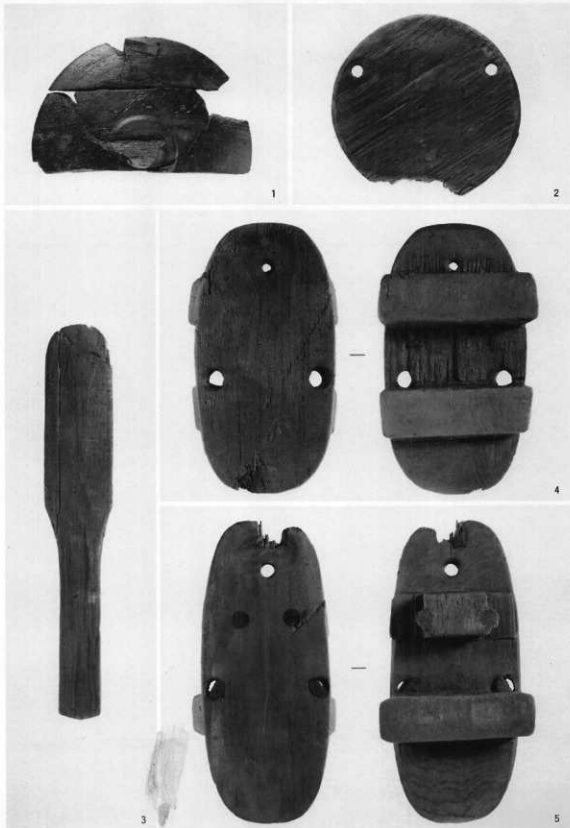
11



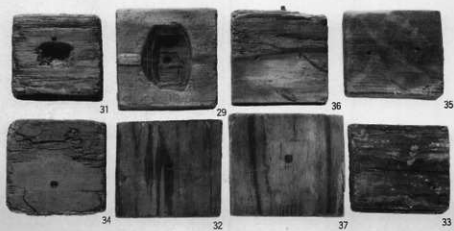
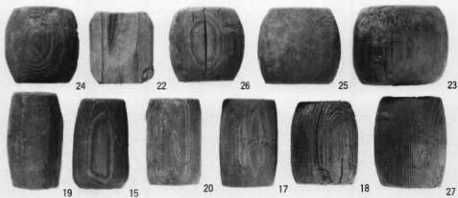
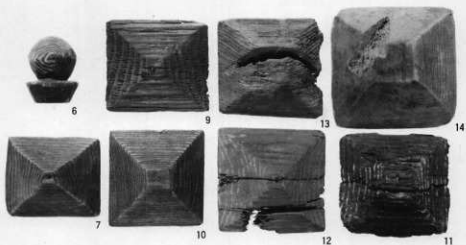
10



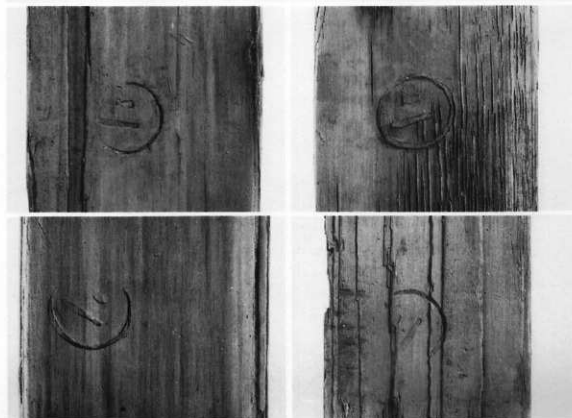
13



木製品 1 蓋1, 円盤2, 杓子3, 下駄4-5



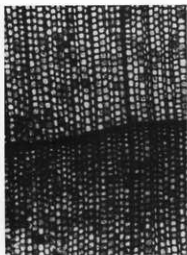
木製品 2 五輪塔、空風輪6、火輪6・7・9-14、大輪15・17-20・22-27、地輪29・31-37



木製品3 五輪塔組立て例 SX 4使用板材



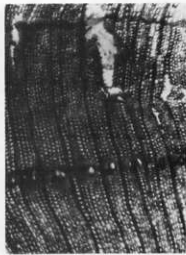
軒丸瓦・軒平瓦



木製品26 カヤ木口(×40)



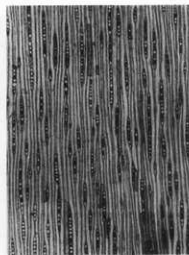
木製品26 カヤ柎目(×100)



杭98 モミ木口(×40)



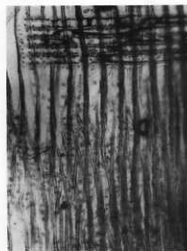
杭98 モミ柎目(×100)



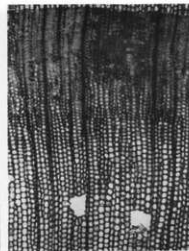
杭98 モミ板目(×40)



杭67 ツガ木口(×40)



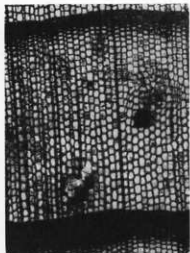
杭67 ツガ柎目(×100)



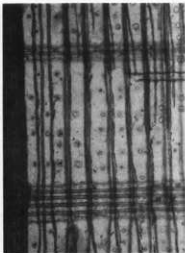
杭19 二葉マツ木口(×40)



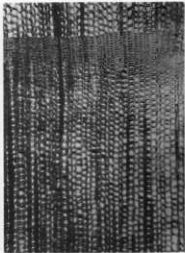
杭19 二葉マツ柎目(×100)



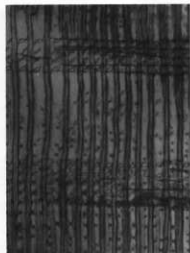
杭47 スギ木口(×40)



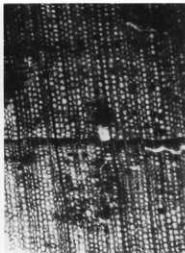
杭47 スギ柎目(×100)



杭5 コウヤマキ木口(×40)



杭5 コウヤマキ柎目(×100)



杭100 ヒノキ木口(×40)



杭52 ヤナギ木口(×40)



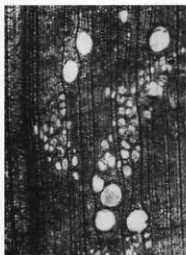
杭52 ヤナギ柎目(×40)



杭46 ノグルミ木口(×40)



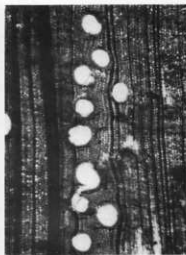
杭46 ノグルミ柎目(×40)



杭76 シイノキ木口(×40)



杭76 シイノキ板目(×40)



杭21 アカガシ亜属木口(×40)



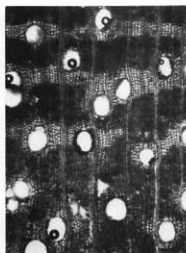
杭21 アカガシ亜属板目(×40)



杭85 クスギ木口(×40)



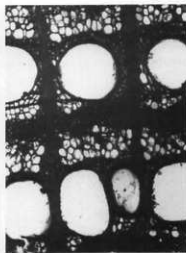
杭85 クスギ板目(×40)



杭11 ムクノキ木口(×40)



杭11 ムクノキ板目(×40)



木製品1 ケヤキ木口(×40)



木製品1 ケヤキ板目(×40)



杭55 サクラ木口(×40)



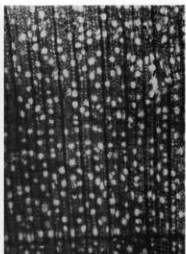
杭55 サクラ板目(×100)



杭23 ミズキ木口(×40)



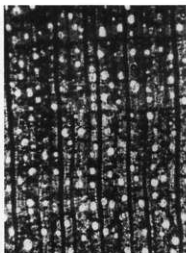
杭23 ミズキ板目(×40)



杭12 サカキ木口(×40)



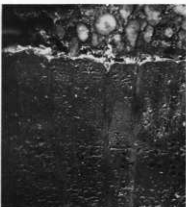
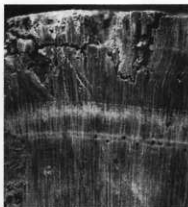
杭12 サカキ板目(×40)



杭9 ユズリハ属木口(×40)



杭9 ユズリハ属板目(×40)



1 年輪 木器26 マツ(×3)

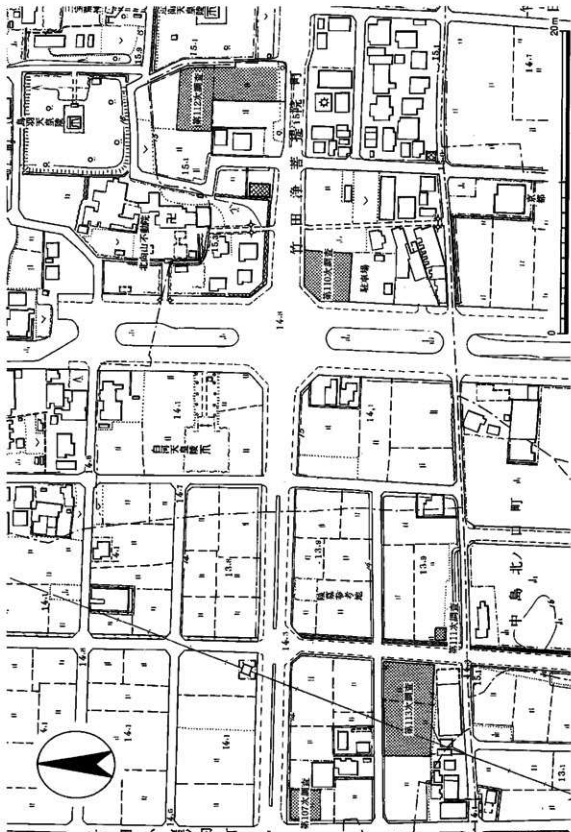
杭84 クスギ(×2)

アカガシ亜属 (×2)

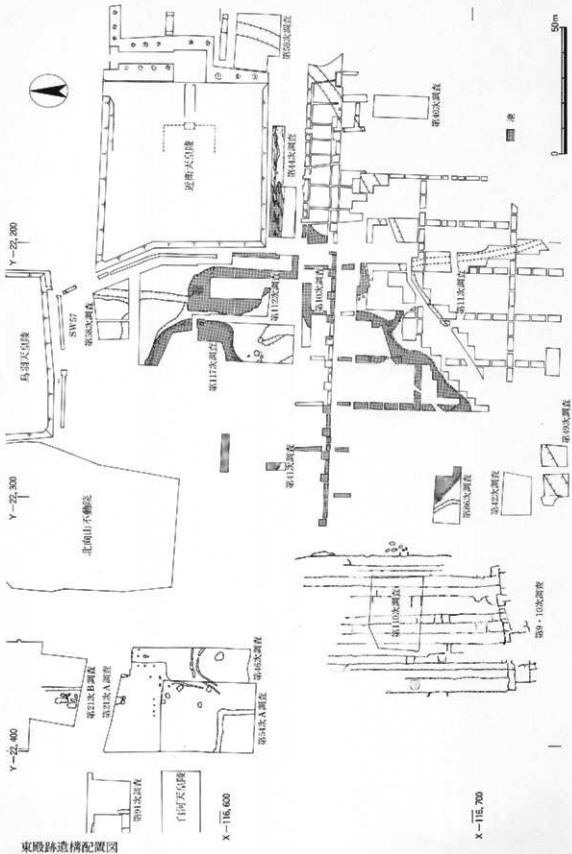


2 ヤマモモ(×3) 4 ムクノキ(×3) 5 エノキ(×4.5) 6 カジノキ(×7.5) 8 サクラ亜属(×3) 9 イスザンショウ(×6)
 10 センダン(×2) 11 カニエ属(×4.5) 13 カキノキ(×3) 14 タデ(×6) 17 スベリヒエ(×12) 19 タガラシ(×12)
 25 ヒシ(×2) 22 カタバミ(×12) 30 メナモミ(×6) 31 タカサゴロウ(×6) 32 ミクリ(×3) 34 オモダカ(×6)
 38 カヤツリグサ属(×12) 28 ナス(×45) 29 ウリ(×2) 36 イネ(×3) 37 オオムキ(×3)

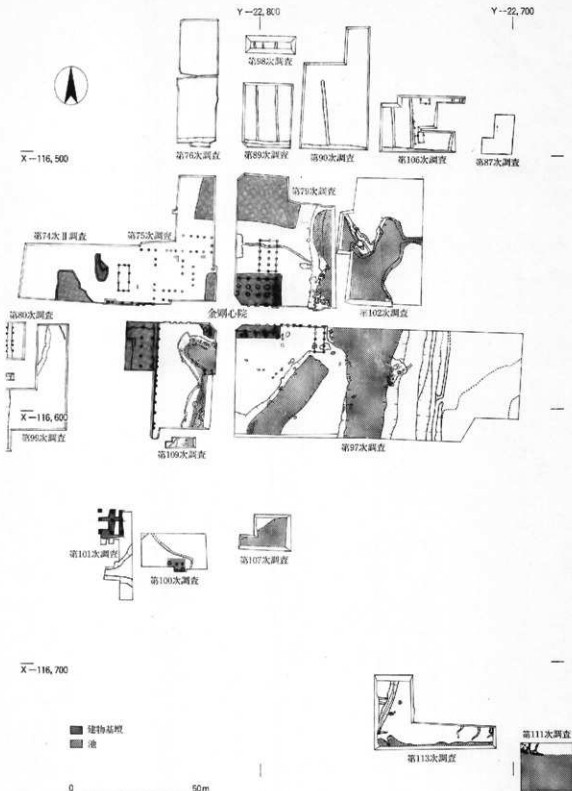
2 江線付近の植物種実



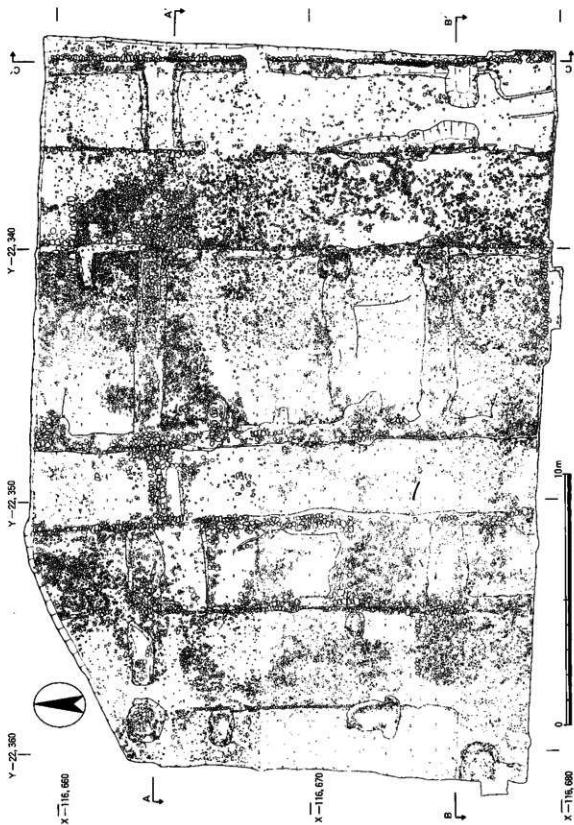
50m



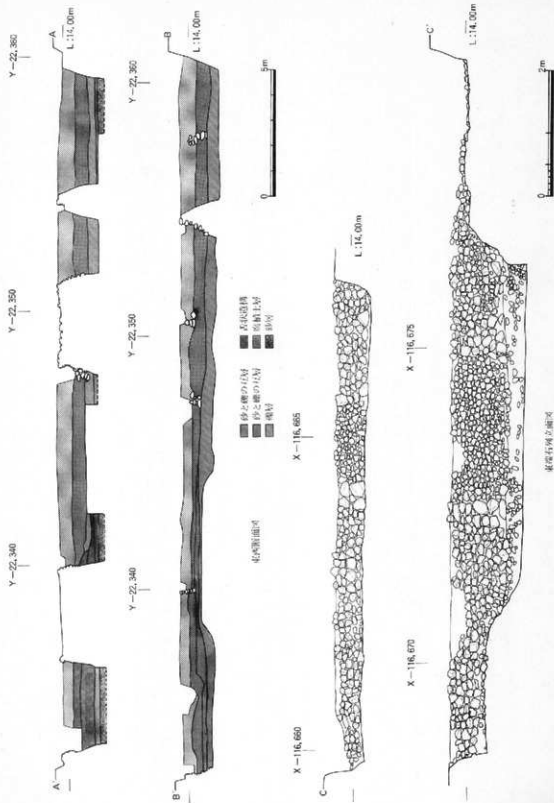
東殿跡遺構配置圖



金剛心院跡及び周辺遺構配置図



遺構実測図



断面図、立面図

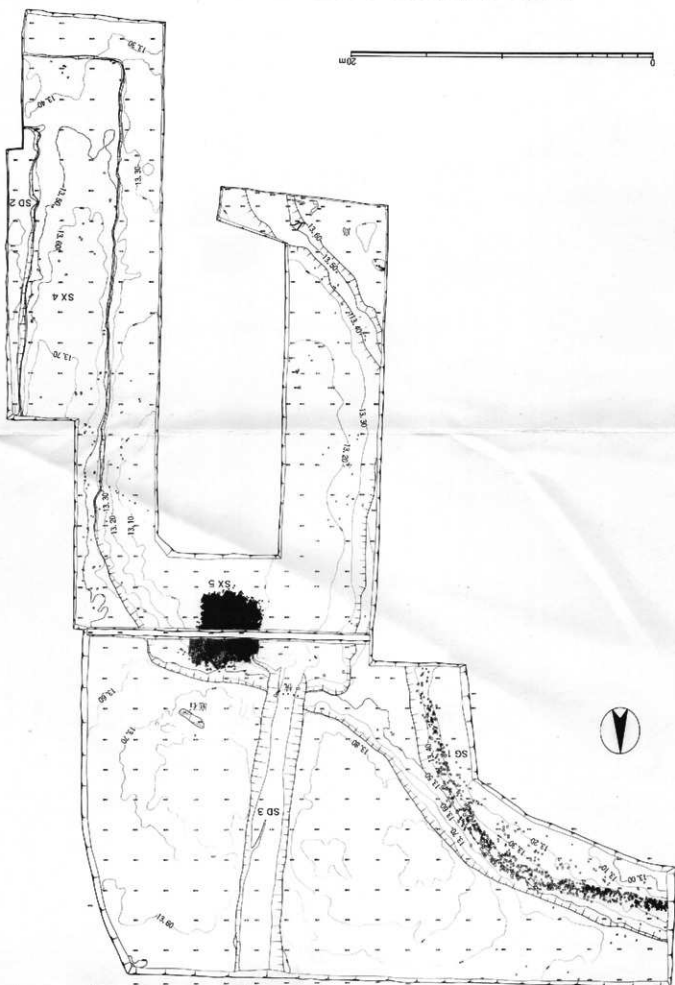
—116,620

—116,600

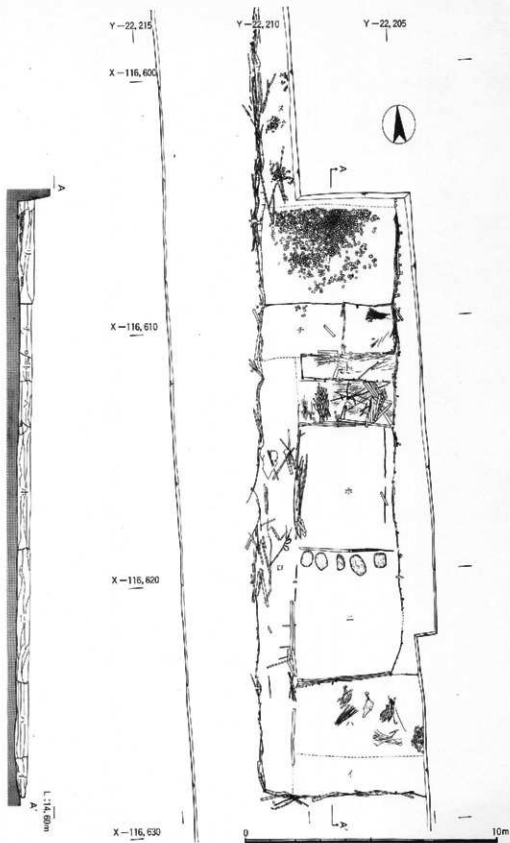
—116,580

—22,240

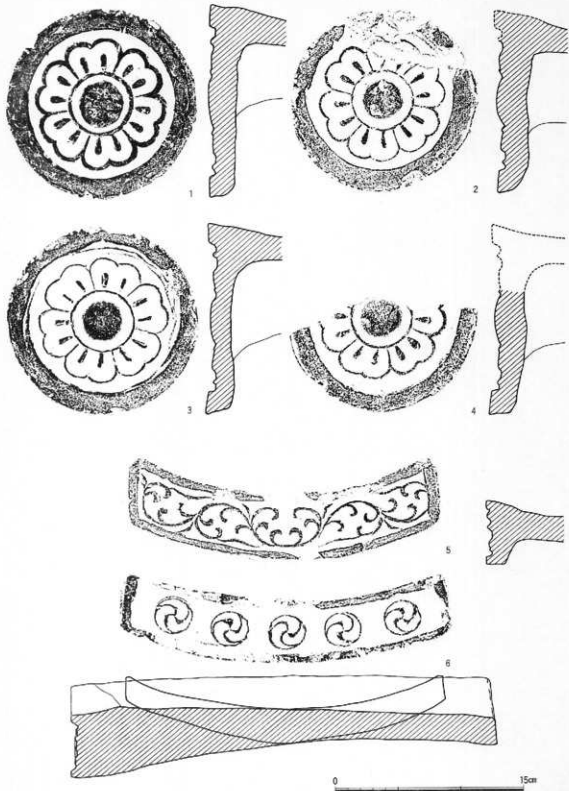
—22,220



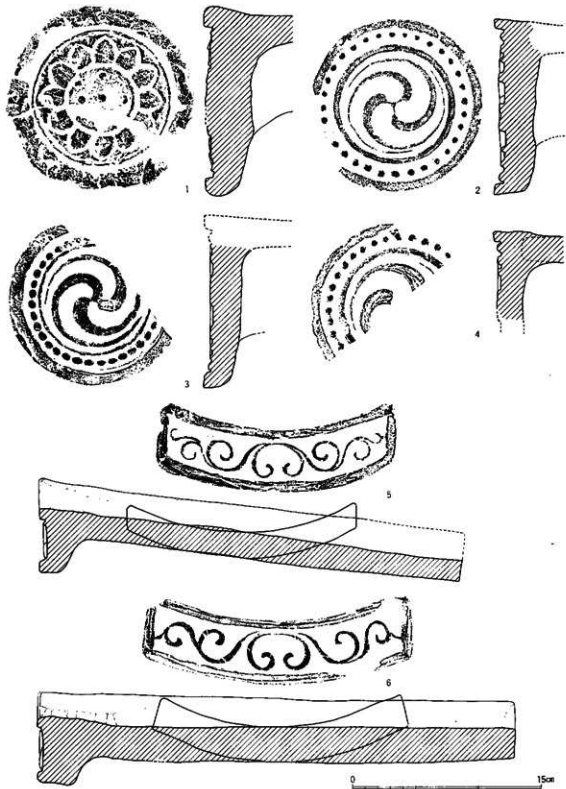
图三三 海防第112次測量



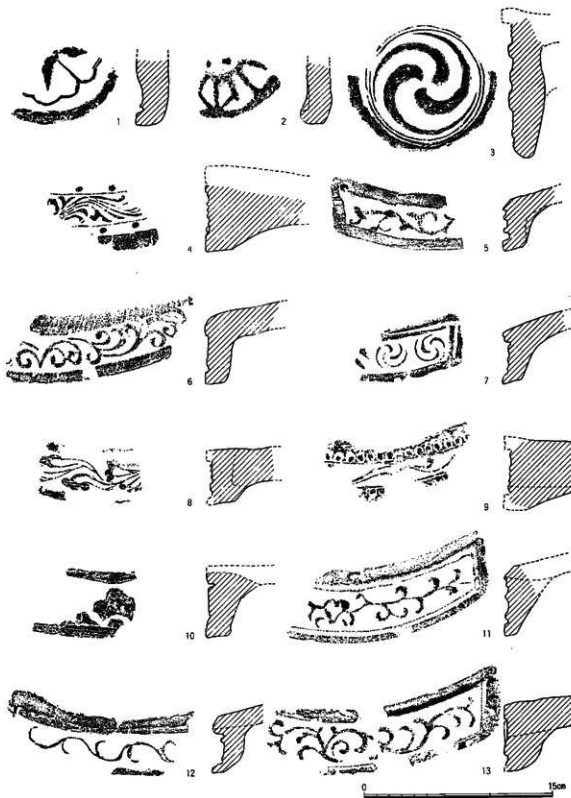
SX 4 実測図



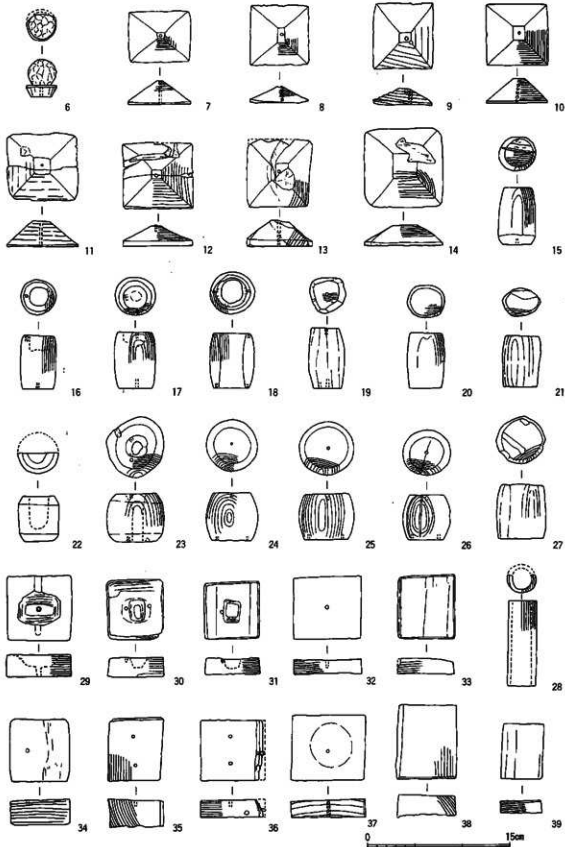
軒九瓦・軒平瓦拓影実測図



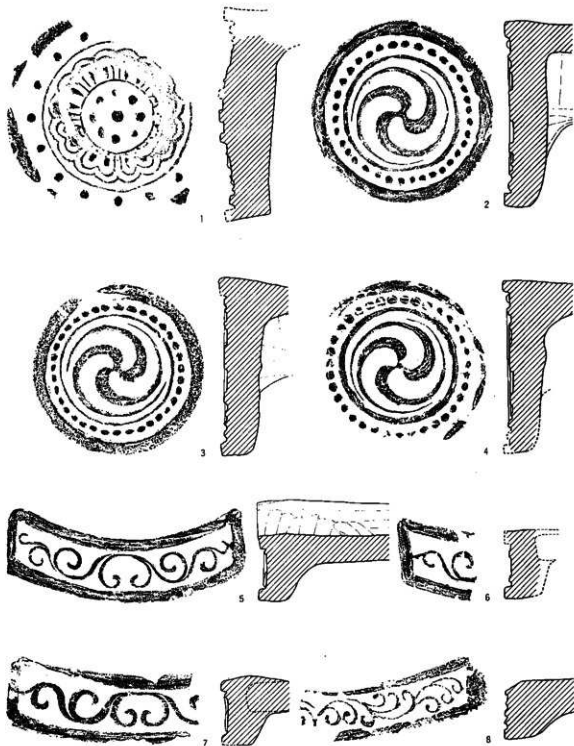
軒九瓦・軒平瓦拓影実測図



軒丸瓦・軒平瓦拓影実測図



出土木製品実測図 五輪塔、空風輪6、火輪7~14、水輪15~28、地輪29~39



0 15cm

軒九瓦・軒平瓦拓影実測図

鳥羽離宮跡発掘調査概報

昭和60年度

発行日 昭和61年3月31日
発行 京都市文化観光局
住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内
編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415-0521
印刷 真 陽 社